

# 記憶を失ったフリをして みた結果

あばずれ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

提督が執務室で仕事をしていたら、突然窓からガラスを打ち破った巨大なカブトムシが!!

巨大なカブトムシで頭をぶつけてしまい、提督は意識を失ってしまう。

そしたら記憶喪失になってしまった。

——というのは嘘で、本当は記憶を失ったフリをしたら艦娘達の様子がおかしくなりました。

※不定期更新

# 目次

1.	ごめんなさい	1
2.	本当にごめんなさい	13
3.	本当の本当にごめんなさい	
4.	本当に本当の本当にごめんなさい	27
5.	ごめんなさいって言うてるよね?	39
6.	ごめんなさいって言わなきゃダメ	51
?		65
7.	ごめんなさいいさなんめご	84
8.	いさなんめごめんなさい	97

9.	ごめんこうむる	108
10.	すいませんでした	122
11.	すいませんでした	137
12.	すいませんでしたと言いたい	149



## 1. ごめんなさい

拝啓母上様

厳しい暑さが続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。このような気候ではあります。私達は元気に過ごしております。

私はこの度、正式に軍人として艦娘を仕切る提督となりました。この日本を護る為に一生涯懸命戦つて参りたいと思ひます。

艦娘との仲も良好で、喧嘩をする事はあまり無く、共に日本を護る仲間として日々訓練に励んでおります。

しかしながら私としては本当に仲が良いのか些か疑問に思ひ、ある事を試してみました。

わざと記憶を失つたフリをしたら、艦娘達はどんな反応を見せるのか。単なる出来心でやってみました。一応明石にはこの事を伝え、協力してくれる形で済ましております。

内心はとてもドキドキしていました。艦娘達がどういった反応を見せるのか、興奮が収まりませんでした。

ですが母上様、私は今――

――修羅場にあります。

「提督、大丈夫デスカ？」

「は、はい。大丈夫です」

「何あざとい視線送ってるんですか、張り倒しますよ」

「別にあざとい視線なんて送ってまセーン。ただ提督の手助けをしてるだけデース」

何故だ、何故こうなった。

ただ単に俺は艦娘達の反応を確かめたかっただけなんだ。何故こんなにギスギスしてるんだ。訳が分からん。

「司令、どこまで思い出していますか？」

「分かりません……ここは何処なんでしょうか？」

「そこまでですか……」

一応設定的には俺はこの鎮守府に着任した記憶は無く、それ以前の記憶までしか覚え

ていないという設定である。なのでここにいる金剛や不知火の事は知らないままで、初めて全員に出会った事になっている。

不知火の事は知らない……あ、はい。

「ご、ごめんなさい。でもここにいてるって事は、私は軍人か何かだった……って事でしようか？」

「そうですよ。相変わらず理解が早くて助かります」

「そうなんです……全く思い出せない……」

まあ、嘘なんですけどね。

本当はめちやくちや覚えてるんだぜ。金剛が夜這いして来た事も、卯月が悪戯を仕掛けてきた事も、島風に一方的に追い掛け回された事も、響のスカート覗いたらボコボコにされた事も全部覚えてる。

翔鶴とケツコンカッコカリした事もね。どうやら翔鶴は今俺の代わりに書類を片付けてくれてるみたいだけど。

申し訳ないっす。翔鶴さん。

後で間宮。パフェ奢るんで許してつかあさい。

「因みに貴方は艦娘とケツコンもされていきますよ」

「え……本当ですか？ 誰でしょうか？」

「私ネ!!」

はいストップ。

何ちやつかり嘘ついてるのかな金剛さん。

「そ、そうなのか……?」

「ハイそうデスよ!! 私と提督は一生の愛を誓ったおしどり夫婦として有名だったんでスカラ〜!!」

……。

色々言いたい事はあるけど、バレちゃまずいし黙ってしよう。

「違います、金剛さん。勝手に記憶を捻じ曲げないでください」

お、流星は不知火。落ち度が全く無いな。

「司令とケツコンしたのは……私です」

いやお前もかああ!!

「違いマス!! 私ネ!!」

「いいえ私です」

修羅場つてこういう事を言うんだろうか……。

二人して新しい記憶を無理矢理、ねじ込もうとしてる。

俺が記憶を失った事を機に、自分がケツコンしたという記憶を塗り替えるつもりだ。



いやね？　好きになつてくれるのはめっちゃありがたいよ？

それこそハーレムみたいな環境で、一日中女性と接してるようじゃ、脳と下半身がパ  
ンクしてもおかしくない訳で。

理性を保ちながら猛攻し続ける艦娘達のアピールに耐えてきて、必死に抑えてきたん  
だぞ。

下半身を。

いやだつて仕方ないじゃん！　エロいんだもん!!

何だよ金剛の巫女服なんてさ、肩出してるし、太もも凄いいしさ。

島風なんて際どい制服着ちゃってさ、下着なんて紐に近いし、隙さえあれば見えるし、  
見せてくるし、てか何回か見たし。

あれで興奮しないなんて男としておかしいからな!?

祥鳳なんてサラシで上半身裸だぞ!?!　あんなの痴女じゃん!!

戦艦や空母の胸部装甲なんて尋常じゃないし……。

とにかくヤバいんだつて。死ぬ、俺の理性が死ぬ。

「とりあえず記憶を戻す為にも、一度同じ生活をしてみた方が良いと思います」

「そうネー！」

という訳で始まりました記憶を失ったフリをする現実世界生活。

さて、俺の演技はいつまで続くでしょうか。

そしてどうなるんでしょうか。全く想像出来ません。

「大丈夫ですか？ 司令官」

「えーつと……この娘は……」

「吹雪さん、司令は今まで貴方達との記憶を失っており、名前も顔も覚えておりません。辛い状況ではありますが、もう一度自己紹介を」

本当にごめんね吹雪。

ていうか俺も良心が痛い。最初の秘書艦は吹雪だもんね。一番俺との記憶を共有しているととっても過言じゃないしさ。最古参の艦娘だし、シヨック受けちゃうのも当然だよね。

だけど俺は記憶喪失のフリをやめないぞ。

「私は吹雪型駆逐艦一番艦の吹雪です！ よろしくお願いしますね！ 司令官！」  
いやーこの笑顔最高。

この邪悪のオーラが全く無いような健気な笑顔って本当に癒される。最初の秘書艦の時は癒されてたなあ。

「よ、よろしくお願いします。吹雪さん」

「司令、貴方は私達の上官です。敬語で話す必要はありませんよ……でも……」

「でも……」

「本当に覚えてないんですね……」

「ごめんね……」

「あの時……私とシていただいた事を……」

「えあ?!?」

初耳なんですけど!!!

俺本当に覚えてないよそんな事!! 思わず素で驚いちゃったよ!!!

え? マジで?

やっちゃった? ハメちゃった? 酒に酔った勢いでそのままお持ち帰り艦娘GO

しちやった?

やばい、心当たりがありすぎてどれだか分からない!!

いやでもそれはそれで (殴

「貴方もですか……司令、今のも嘘ですよ。気にしないでください」

「あ、そそそうなんです。驚きました」

「全く……何でもこうも記憶を捻じ曲げようと……」

さつき貴方もしてたよね不知火さん。他人の事言えないよ？

「そ、それじゃあ……んじゃよろしく……ね？」

「はい！ よろしくお願ひします！」

いや本当に焦った。マジで焦った。バイ〇ハザードRE2のワニ追っ掛けてくるぐらい焦った。

この様子だと他の艦娘達もやってくるかもしれないな。注意しないと……。

「司令官！ 執務室はこっちですよ！」

「う、うん。ありがとね」

「いえ！ これも艦娘の務めです！」

健気過ぎて泣きそう。

「ここが執務室です！」

「……が……」

もう親の顔より見たようなドアっすね。何年も出入りしてる訳だし。

さーて中に――、

「提督ウ!!」

「うわッ!!」

いきなり金剛が飛びかかってきたから思わず反射神経で避けちゃったよ。

「だ、大丈夫かい？ 金剛？」

「大丈夫デース！」

「流石は司令、頭では覚えてなくても身体が覚えているようです」

いやまあ金剛が飛びかかって来るのは知ってたけどね。

二日に一回のレベルでロケットみたいに飛んでくるし。もう避けるのも慣れたものよ。

「提督！ ご無事でしたか!？」

「え、えーつと……この娘は……?？」

「翔鶴さんです。貴方の秘書艦ですよ」

「話は既にお伺いしています。とても悲しいですが……受け入れなければなりませんね」

「ごめんなさい……」

「いえいえ！ 謝る必要は無いんです！ これからまた思い出を作っていくましょ？」

あれ？ 凄く心が痛い。

やばい。涙出てきた。

どうしよう、嘘だつて言ったら一生口を聞いてくれないかもしれない事案が発生するかもしれない。

本当は嘘でしたって言うつもりなだけで……

「いえこれから提督は私と仕事です！」

「いえ司令官にこの鎮守府を覚えてもらう為に連れていかせます!!」

両方に腕引つ張られて痛い!! 助けて死ぬ!!

あ、でもじかに胸当たってるし、

腕スベスベだし、

この状況めちやくちやいいからもう少し黙っていよう。

「はあ……仕方ありません。確かに提督にはこの鎮守府の事を知ってもらう必要がありますね……」

珍しく翔鶴さんが譲ってる……まあ確かに鎮守府の責任者が覚えてないんです、じゃ話にならないもんね。

まあ覚えてるんですけど。

「……よしッ!!」

俺の背中に隠れて喜んでるのバレバレだよ不知火さん。

ガッツポーズするほど嬉しかったのね。てか金剛さんや吹雪がいつの間にかいないだけで。

何で？

「では司令、こちらに」

「う、うん……」

「お気をつけて提督、不知火」

何か胸騒ぎがするなあ。不吉な予感、というか……一波乱起きそうな気がしてならぬい。

「司令！ 聞こえてますか？」

「あ！ ごめん、考え事をしてたんだ」

「全く……そういう所も同じですね……」

不知火さーん！ 目の前に壁ー！ 壁があるよー！ 前を見て喋ってー！！

「不知火！ 前！ 前ー！！」

「え？」

あ、これ勢いよくぶつかったな……大丈夫かな……。

「不知火？ 大丈夫か？」

「どうしたの？ 不知火!？」

「陽炎か!? あっ」

「いえ大丈夫ですよ、陽炎姉さん。ぶつかっただけで……ん？」

「……あれ……確か司令官って記憶失ってるんじゃない……」

「今先程……陽炎って……」

「……あっ」

「……」

P. S. 母上様。

記憶喪失のフリですが、始めて一時間でバレました。  
助けてください。



## 2. 本当にごめんなさい

「さーて……どういう事か、説明してもらおうよ」

「半端な理由であれば消し炭にしますので、言葉の選び方には気を付けた方がいいかと」  
裁判開廷。

俺は陽炎達の部屋に監禁され、尋問されています。

ぶっちゃけ監禁ならされたいかなって思ったけど言えば本当に殺されかねないので  
黙ります。

「えーとですね……出来心というか……探究心というか……」

「へえ……そんな出来心で私達を騙そうとしてたんだ……不知火」

あつやばい。艦装出てきた。ガチャンって砲弾装填した音聞こえたよ。

「ストップストップストップストップ!! いや本当にごめん! ただ君達の反応が知り  
たくてさ! 騙したのは悪いと思ってから許して!!」

土下座するのは久しぶりだなあ。

前に赤城さんとイチヤコラした時に間違ったフリして胸触ったらエスカレートし過ぎて加賀さんと翔鶴さんにボコボコされたからなあ。

いやまあ、下着見えたんで結果オーライです。

「……はあ……私達本当に心配してたのよ？ 記憶喪失って聞いて悲しかったんだから」

「シヨックを受けてる艦娘だっているんですよ？」

「それは本当に申し訳ないと思ってる。ただ……俺はちゃんと君達とやっていけるかどうかを知りたかったんだ……もし仲が悪ければ君達は俺の事を心配なんてしない……」

「それは……」

「だから嬉しいんだ、心配してくれていた事は。俺は仲良く出来るんだ、って」

ついでにセクハラも出来る且つ、許してくれればなっと思っています。

「……仕方ないわね。いいわ、付き合っただげる」

「え……本当か!？」

「本当よ。ね？ 不知火」

「致し方ありません。陽炎姉さんが言うのであれば許しましょう……ですが」

「司令官が心配せずとも大丈夫よ！ 私達にとっては最高の司令官だから！」

「心配する必要はありません。私達は貴方がいれば安心出来るので」

え？ 優しすぎない？

何これ、浄化されちゃう。俺の邪心がどんどん浄化されちゃうよ？

涙出そう。この娘達がこんなに優しいなんて嬉しい以外の言葉が見当たらない。

あー……軍人やつて正解だなー……。

「……まあそれはさておき」

あつ。

「騙っていたという事はこれまで私がしてきた事も覚えているはずなので司令には罰を受けてもらいます」

……。

あつ。不知火の赤面顔かわいいなあ、写真に収め（殴

「——んで、これからどうしますか司令」

「どうひようへ」

何発か殴られてまともに喋れません。電気アンマされて股間も物凄く痛いです。というの嘘でぶつちやけ気持ちよかつた。

「一応全員分の反応を確かめたいから……このまま騙していたんだけど……」

「まだ騙し続ける気？ 手遅れになっても知らないわよ？」

「後で私達に縋っても協力はしません」

確かに陽炎の言い分は当たってるんだよなあ。

前の吹雪や翔鶴みたいに記憶を失った事でシヨックを受けた艦娘が複雑な事を起こして、実は覚えてましたーって言えば何されるか分からないわけで。

場合によつては不知火みたいに罰を受ける可能性すらあるんだよね。

まあ我々にとつてはご褒美だったんですけど。

「大丈夫だつて。そのうち考えるさ」

「ではとりあえず、各々反応を確かめますか？ 司令？」

「うん、行くよ。付き合わせてごめんね陽炎、不知火」

「大丈夫よ」

「……いえ、大丈夫です」

何とか陽炎と不知火の二人には了承を得て同行してもらう事になりました。

他の艦娘達が何かすれば意図的に演技してくれるらしいのでこのまま続けようと思う。

「はあ……」

さて部屋を出て、艦娘達の反応を確かめたい訳ではあるけれど……。

「何ため息吐いてるんですか。元はと言えば司令の自業自得ですよ」

「いやいや早くバレたのが悔しくてさ」

「それも司令官の自業自得」

「いやでも不知火が言ってくれたのは嬉しかったなあ」

「それも司令の自業じ……と……く……く……」

「……」

「……いえ……私の落ち度です」

やはり赤面する不知火はかわいい。 p i o i v とかに描いてる人いないかな。

「司令官ですね！」

「あゝさうわあゝいいねえゝ……ごめん、この娘達は？」

あつぶな、思わず名前呼びそうになったわ。

朝はいいねえとかなんだよ、殺すぞ俺。

「……ハア……朝潮型の皆さんです。順に黒髪長髪の娘が朝潮」

「よろしくお願いしますね司令官！」

「ちよつと黄色の……あーもう面倒くさいんで端折ります」

「端折るな!!!」

案の定、満潮と霞が怒り出してる。

この二人は初めて会った時から少し苦手なんだよなあ。

凄い見下してくるし、クズなんて言ってくるし。挙句の果てには嫌われてるし。一体

俺は何をしたんだろうか……心当たりがありすぎてどれだか分からない。

「つたく……記憶喪失つてのは本当かしら？ 不知火」

「ええ……まあ……本当です」

「……ああそう。まあ大して何も変わってないようだけど、仕方ないわね」

凄じ上から目線の様気がするけど気にしない気にしない。

後でパンツでも覗いてなかった事にしよう。

「えーつと……朝潮に満潮、霞だね。これからよろしく」

前だったら手を勢いよく叩かれたけど今回もそうなのかな。

「よろしくお願いします！」

「……よろしく」

「……よろしく頼むわ」

あれ？

凄じ素直じゃん。前までの高圧的な性格はどこにいったのかな。

「ところで司令官は覚えていないのでしょうか？」

「何をだい？」

「私達と一緒に寝てくださった事です」

……。

え？

いやいやいやいや待つんだソウルブラザー。一回冷静になろうぜ、心を落ち着かせるんだ。

邪心に飲まれ過ぎだぜ。

今の寝たという発言はすなわち添い寝を意味する可能性がある。だが場合によってはヤッチャつたら（自分の身が）危ない艦娘ランキング上位勢と乱○パーティーした意味になってしまうではないか!!

それはそれでやってみた——じゃなくて!!

一回聞こう！ それがいい!!

「ごめん……それって……?」

「そのままの意味ですよ？ とても良かったのに……」

何で詳細を話さないの!!? とても良かったって何!?

そのままの意味で分かるわけ無いじゃん!! 二つの分岐があるんだぞ!!

本当に一緒に寝たのか、それとも乱○パーティーしちゃったのか!!

いや待て。疑い過ぎじゃないか？

まあ確かに心当たりはあるものの、それは全て自身の記憶にあるものだ。

ただでさえ俺は記憶喪失という状態……………!!

吹雪の様に嘘で新しい記憶を振り込もうとしてる可能性がある。

だがしかし腑に落ちない。あんなに真面目で賢い朝潮が普通、他の艦娘達の様  
に嘘をつくだろうか。

まずは陽炎と不知火の反応を確かめよう。

「これって……………一緒に寝てあげたって事だよね?」

「さあね」

「さあどうでしょう」

……………んまあ、砂浜に打ち上げられたビニール袋を見るような目で見てくる時点で大体は察してたよ……………。

「満潮、霞、君達と一緒に寝たって事は添い寝、みたいな事かい……………?」

「そうだよ!! 満潮と霞なら否定してくれるかも——、」

「……………言わせないですよ……………バカ」

「本当に覚えていないのね……………」

否定しろよおおお!!!

「あの時は痛かったんだから……………」



「少しだけ認めてたのよ……?」

えっ、えっ、えっ、えっ?

待って? マジで覚えてないって。

痛かったって何? 初めて破っちゃった?

もらっちゃった? 俺。

俺のイメージ相当酷くね? これじゃまるで変態ロリコン女たらしクズ野郎じゃん。

「うわっ、最低……」

「……変態ロリコン女たらしクズ野郎」

クズだけ無駄に強調しないで!! 泣きたくなってくるから!!

あーもう分かりました。ヤりましたよ、ヤっちゃいましたよ。ヤった事にすればいい

んでしょ?

どうせクズですよ。どうしようもない変態ロリコンですよー!

……ああもう自分で言ってて悲しいわ……コレ。

「仕方ありません、また作ればいい話です。改めてこれからよろしくお願いします!」

いやもう勘弁して、お願いだから。給料少しだけ上げるから……。

ああ……帰っていった……。

パンツ、何色か知りたかったな……。

「振り回されっぱなしね」

「見てて面白いモノがあります」

くそっ……この二人にバレたのはやはりまずかったか……!!

「因みに朝潮さんの言葉は一緒に添い寝してもらった事ですよ」

「やっぱりそうじゃん!! 何で言ってくれなかったの!?!」

「戸惑う司令が見れると思つて」

怖っ、悪魔の子かよ。現代の娘達は何するか分かったもんじやないな。

「おっ提督……つつても初めましてか?」

「えーつと……この娘は……」

「俺様の名は天龍だ! フッフ、怖いかな?」

いや全く。

「て、天龍か。よろしくな」

「フン……ちよつとこつち来てくれないか?」

「え? は、はあ……」

ん? 何かよそよそしいな。

天龍にしては珍しいというか、こそこそ話なんてする奴だったつけ?

「あのさ提督って本当に記憶喪失なんだよな?」

「ああ、そうらしいけど……それが？」

「……実はさ俺、提督とケツコンを前提に付き合ってたんだよ」

What?

「え……そうなんですか……？ でも俺は翔鶴とケツコンしてるって……」

「馬鹿野郎、そんなの嘘に決まってんだろ？」

Oh……。

天龍お前……俺が記憶失ったからって新しい記憶を振り込もうとしてるな。

しかも辻褄がいいようにちやんと話作ってる辺り、用意してたなコイツ。

あーでも肩寄せて腕組まれた状態から見下ろす天龍の胸見えるわー。

バインバインだな本当に。どんな生き方したらこんなでつかい山二つが出来るわけ

？

牛乳飲み過ぎじゃない？

やつば興奮してきた。胸見えすぎだもん。仕方ないね。

「つて聞いてんのか提督！」

「あつ、ああごめん。考え事してた」

「はあ……そういう所は覚えてんだな……」

「なあに嘘ついてるのかなー？」

「ゲッ」

胸凄いなあ……つて龍田さんじゃん。

……。

胸凄いなあ……。

「あ、いや、龍田！ これは……その……！」

「ごめんなさいね提督。天龍ちゃん、ちよつとばかりショック受けてて気が動転してるの」

「えーつと君は、龍田……？」

「ええそうよー。天龍ちゃんの妹なの。よろしくね」

「は、はい！ よろしくお願ひしますー！」

さつきから焼け焦げた塵カスを見るような目で見ないで。陽炎さん、不知火さん。分かってるつて。反応確かめるだけだから。

「ほら行きましょー天龍ちゃん」

「お、おう。分かった」

「あ、提督！ 一つ言い忘れてました」

「はい、何でしょう」

うわっ、いきなり近付いてきた。耳元に口を寄せてきて、吐いた息がじかに感じる。

エロ過ぎるだろ!! セクハラだ!!

「また遊んであげるからね……? ばいばい」

What? (2回目)

遊んであげる? 何を? おっ〇い?

はいその君、遊んであげるでエロい想像した人は心が汚いぞ。

現にあの遊んであげるは本当だからな! S Mプレイも中々いいから、よく覚えろよ

!!

え? 俺の所為だつて?

はい……

……ごめんなさい。

「茶番は済みましたか? ロリコン」

「見ててイライラしたけどね。変態マゾ」

「悪口は褒め言葉として受け止めておくよ」

本当はめっちゃ泣きたいけど!!

「ちよつと外に出ようかな。色んな艦娘と出会えるかもしれない」

「私はいいけど案内任された不知火は地獄よね……」

「後で間宮チケツト数十枚貰う予定です」

「さあ行こうか!! 二人とも!!」  
「何で司令官はやる気なの?」

### 3. 本当の本当にごめんなさい

いやー今日は実に快晴、おひさまの力が素晴らしいですねえ。

涼しい風と暖かい日差しが何とも心地よい。

まあこの二人がいるおかげで全て掻き消されるんですがね。

「さーて今度は誰に会えるのかなー」

「何故こんな事に付き合わなければならぬのよ……」

「全くもって同感です」

ごめんなさい、後で色々奢るから許して。

「あつ噂をすれば提督じゃんか！」

この声は……摩耶か？

「アタシは摩耶だ！ よろしく頼むぜ！」

「私はその妹の鳥海です。提督、これからよろしくお願いします」

あの姉二人とはまた違った違った姉妹だな。この娘達は戦闘面で感謝してばかりだったな……。

……いや、エロい事も考えていました。

「摩耶さんと……鳥海さん、ですね。よろしくお願いします」

でも記憶失ってる（前提な）のでそんな事は一切覚えておりません。

「記憶喪失とはたまげたもんだなあ提督も。あたし達の事、何もかも忘れてる訳かよ」

「ごめんなさい……どうやらそうみたいです……」

そんな「は？」みたいな顔で睨まないで。

陽炎さん、不知火さん、気持ちちは分かるけど表情だけは抑え込んでね。

「はあ……そつか……忘れちまつたんだもん……仕方ないか……」

「摩耶、気を悪くしないで。悲しいけど……」

え？ また捏造していくタイプ？ そんな寂しげな表情して？

もう騙されんぞ。

どれだけ不遇な目にあつたか、経験値はめちやくちやあるんだからな!!

「今日酒飲む約束してたのに……」

ごめんなさい、本当に忘れてました。

そういうえば記憶喪失のフリをする前日に約束してたんだよな。興奮しちやつてすっかり忘れてたわ。

「え!?! そうなんですか!?!」

「あ、ああ。約束してたんだけど記憶失ってちや意味無いもんな」



「初めて会った様なものなのにまた誘うのも提督にとつては難しいですものね……仕方ありませんよ」

うっ……心にグサツと何かが……!!

「あの時の提督の笑顔は良かったな……」

「楽しそうに飲む姿は眼福でした……」

「クソツ……あの時あたしが無理にでも言えば……!!」

「やめて摩耶、貴方の所為ではないわ」

ん？ 何か重くない？

「鼻毛が出てるのを……教えられたのに!!」

くっそどうでもいいなオオイ!!!

鼻毛が出てるって何だよ!! 初めて君達からそんな言葉聞いたよ!!

そんな事の為に重い空気出してたの!!?

鼻毛が出てただけで!!?

馬鹿じゃないの!?

そんな出てる訳——、

「あ、本当だ」

あつたよ!! 出たよ!!

思いつ切り長いの出てたよ!! 分かんなかったよ!!  
じゃあ何!?

俺ずっと鼻毛出しながら記憶失ったフリをしたの!!?

恥ずかしいんだけど!!!

物凄く恥ずかしいよ!!

つて事は陽炎と不知火もこれを――、

「ぶっ……しゅー……!!」

「っ……!!」

お前から最初から気付いて言わなかったのかコノヤロー!!!

薄情者!! 変態!!

「仕方ないわ摩耶、これからまた注意すればいいだけよ」

「ああそうだよな、落ち込んでる暇なんて無いよな」

俺の鼻から鼻毛出てた事が注意出来なかったぐらいで落ち込んだの？

しかもこれからって何!?! 俺ずっと出してたの!?!

ちよつと傷つくんですけど!!

「あ、そうだ陽炎と不知火。これから遠征らしいからそろそろ行った方がいいと思うぜ」

「そ、そうですか……! 分かりました……今行きつ……ます……!」

笑いこらえながら答えるのかよコノヤロオ……!!

「じゃあな提督、これからよろしくなー!」

クソツ……また狂わされた……!!

ちくしょう、振り回されっぱなしだぜ。

「すみません……どうしても面白くて……!」

「ギャハハハハ!!」

「笑わないで、死にたくなる」

「まあまあ、これから気を付けなければいいだけよ司令官」

「そうです……気を付けられブフォ」

「ギャヒヤヒヤヒヤヒヤ!!!」

ヒャーヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ!!

突然吹かないでよ不

知火! 笑いが……!」

もう……誰でもいいから俺の事を誰か殺してください。

死にたいです。

「つて事で私達は遠征に行くから、精々勘違いしない事ね!」

「今度は私達も助ける事は出来ないのです、では」

元々助ける気なんてさらさら無いくせに……。

「はあ……」

「あれ提督ですね。どうしました？」

「あつ、えーつと……君は？」

「そういえば記憶喪失でしたよね。私は榛名、金剛型戦艦三番艦の榛名です！ これからよろしくお願いしますね！」

あつ、癒される。

この笑顔最高に可愛い。今まで傷ついた心が癒されてく。

これが、尊い……かつ……。

「つて提督、何倒れてるんですか!? 大丈夫ですかー!？」

「あつとごめんなさい、少し目眩がしたもので……」

「目眩？ ですか……少しお疲れの様ですね、私の部屋でお休みしますか？」

「そうですね、ちよつとお休みしたいです」

「ふふっ……敬語じゃなくていいんですよ。貴方は私の提督なので」

やばい涙出てきた。

何だよこの純粹さ。りんご果汁100%並に純粹過ぎて前向けない。

「着きましたよ提督。ここが私の部屋です！」

普通のお部屋だね。どこの部屋ともそんなに変わらない。

んでも待てよ？ 確か榛名って金剛達と同じ部屋だった気が……。

「提督、これを」

んんん???

何で手錠されたの？ 身動き出来ないんだけど？

新手の拘束プレイ？

「榛名、何で手錠なんて……エエエエエエエエ!!?!」

押し倒されたアー!!

ちよつと待って!! 本当に身動き出来ない!!

「何を慌てるんですか？ 昔はこうして二人で遊んでいたじゃないですか……」

いや全く記憶に無いんだけど!!?

また捏造する気か!?

「ちよ、ちよつと待て榛名!! これはさすがにまず——」「私は問題無いので」

俺に問題があるんだよ!!!

記憶喪失のおかげで周りの憲兵達も少し心配してくれてるの!!

こんな俺でも何故か信頼されてんの!!

何故か分かんないけど!!

それに俺の威厳が無くなってしまふ。

提督として一定の関係は保つべきだ。

色々変態みたいな事ばかり言っていたような気がするけれど、いや言っていない様な気もする……言ったつけ？ そんな事。

……多分言っていないけど色々あるから、榛名には仕方ない。

ここはちゃんと説明して――、

「どうですか……？ 私の胸に蹲る気分は……」

ちゆき。

もうどうでもいいや。威厳とか信頼とか。

深海棲艦と戦ってる事とかもういいんすよ。幸せを勝ち取る事は即ち人生において勝利を意味するんすよ。

僕ちんの桃源郷はここにあったんだ。

「つて何やってるんですか!! 提督!! 榛名姉さま!!」

この声は……あーもう誰だっついていいや。

「霧島?! 何故ここが……!!」

「提督の跡を……ではなくて、大きい声が聞こえたのもしかして……と」

「何も悪い事はしてないわ霧島。ただ愛し合ってただけよ」

「記憶喪失中の提督には刺激が強過ぎます! そのような事は仲良くしてからやってください!! ほら、行きますよー!」



達ばかりだったのに！

記憶喪失のフリをすればひたすら身に覚えのない記憶を捏造して、自分のモノにしよ  
うとしてるんだもん！

殆ど下ネタでしかないよ!! 健全の「け」すら無いよ!!

艦娘との仲の良さを調べる為にした事がまさかこういう結果を生むとは知らなかつ  
た……。

ああやって既成事実みたいな発言をするのは恐らく異性に対する感情が溢れた結果  
なんだろうな。

ただでさえ女性が多いこの鎮守府じゃ、ストレスの発散方法も少ないし。

少し見直す必要があるなあ……。

「あー、すいません、自己紹介が遅れました！ 私は金剛型戦艦の四番艦、末っ子の霧島  
です！ よろしくお願ひしますね」

初めてまともな艦娘に出会った気がする。

いや騙されるなよ俺。こうやってまとも信じれば後のダメージが大きい。

常に警戒網を貼るんだ。

「記憶喪失という事もあって色々大変かと思いますが、頑張ってください——」「ここにいた  
のね霧島」



この声は比叡だな。あれ？ 金剛がない……おかしいな。比叡は金剛にべったりなのに、一人でいるとは珍しい。

「あら比叡姉さま、金剛お姉さまは？」

「金剛お姉さまは今！ 準備をしております!!」

その準備という物を教えてください、寒気がしました。

「あ、提督！ こちらは私と同じく金剛型戦艦の二番艦、私の姉である比叡姉さまです」

「よろしくお願ひしますね！ 提督！」

元気な声で耳も素晴らしい気分だよ比叡。

元気があつて大変よろしい。

「よろしくお願ひします、比叡さん」

「いえ敬語は使わないでください提督！ いつものように話していただけたらと思いま

す！ さん付けも必要ありません！」

「そ、そうか……んじゃこれからよろしくね」

「はい！ よろしくお願ひします！ それで霧島、少し頼み事があるのですが……」

「はい、何でしょうか？」

「今すぐそこを退いて提督とセツ〇〇させてください!!!」

率直過ぎるだろオオオオ  
!!!!

## 4. 本場で本当の本当にごめんなさい

率直過ぎるだろオオ!!!

比叡さん、ちよつと頭を冷やして!!

貴方頭がおかしいのよ!!

何!? 仮にも記憶喪失の人に性交渉を求めるなんて馬鹿じゃないの!!?

記憶喪失じゃなかったら普通にオーケーしてたよ!!

「……比叡姉さま、仮にも記憶喪失中の提督に性交渉を求めるのはどうかと……」

「あれ? 悪かった?」

「いや悪いですよ、何悪くないみたいなの顔して言ってるんですか!!?」

霧島がツツコミに回るといふ何とも珍しい一面である。

「金剛お姉様が今がチャンスだと仰ってたので……」

「違いますよ比叡姉さま、今の提督はかなりデリケートです。慎重に接しなければ——」

「提督って受け、ですか? 攻め、ですか?」

「人の話聞いてましたあ!!!?」

凄いい攻めっぷりだな比叡。思わず攻めと答えそうになってしまったよ。

霧島はだいぶ苦勞してるなあ、この様子だと。

「駄目です比叡姉さま、例え比叡姉さまでも提督には近付かせません」

「ズルいよ霧島、独り占めだなんて」

「ひひひ独り占めではあ、ありません!! 提督と節度あるコミュニケーションを取っていただかないといけないので、傍にいて手伝ってるだけですよ!!」

「え〜? そうかな〜?」

唯一霧島さんだけだな、様子がおかしくならない艦娘は。

何もかも初めてだろう俺をサポートしようと思死になってくれる。何だかんだで優しい娘なんだよね。

「とにかく、提督にはこの鎮守府を把握してもらおう為にも覚えてもらわなければなりません。陽炎と不知火から頼まれましたので、私のご案内しますね提督」

「う、うん……よろしくね」

「んじや私もついていこー!!」

霧島と比叡と一緒に鎮守府の案内が始まりました。霧島は少し危ない比叡を警戒しているね。なるべく俺から離れないように適度に接してくれてる。

「提督、今ここの寮が戦艦寮です。私達金剛四姉妹やその他の艦娘達が居住しています」  
「なるほど」

「そしてこちらが戦艦寮の講堂、といっても簡単なエントランスホールです」  
「なるほど」

「提督が記憶喪失だなんて……不幸だわ……」

「そしてその壁に縋っているのが山城さんと扶桑さんです」

「なるほど」

「そして先程提督を見つけて椅子とテーブルを壊したのが武蔵さんと大和さんです」  
「なるほど……いやなるほどじゃないな」

何で立ち上がったただで椅子とテーブルが粉々になるのさ。どんな超人的な力持てばそうなるんだよ。

「提督か、苦労してるな」

「えーつと……君が大和？」

「違います！ 私が大和です！ 眼鏡をかけてるのが武蔵ですよ！」

流石は大日本帝国海軍最強の切り札、大和型戦艦。高身長且つ威厳が凄い。  
俺の提督の威厳なんてそこら辺の木屑程度にしか見えない。

いやもうちよつとあつても（殴

「ごめんなさい！ 貴方が大和さんで、貴方が武蔵さん、ですね」

「む、敬語で話し掛けられると少し違和感があるな」

「提督、敬語は使わなくて大丈夫ですよ」

「そ、そうでしたか……んじや、これからよろしくね」

正直この二人に逆らったら死にそう。

「提督が記憶を失ってる……なんて事でしょう」

「不幸ですね……扶桑姉さま……」

「不幸……？ えーつと君達は扶桑と山城、かな？」

「扶桑です……よろしくお願ひします」

「……山城です、よろしくお願ひします」

「う、うん……よろしくね」

扶桑と山城のネガティブさが段違い過ぎる。最大レベルが五、だとして通常のレベルが二、なんだけど今はそのレベルが最大なんすよね。

だからネガティブオーラが尋常じゃなくてどうやって話そうか悩んじゃう……。

記憶喪失する前はあまりこんな事は無かったんだけど、記憶喪失した後で着任頃に

戻っちゃったな。

「だ、大丈夫かな？ 二人とも？」

「大丈夫ですけど……大丈夫じゃないです……」

どっちなんすか。



貧乏神というか死神に変貌してるんだけど？

「どうしました？」

「あ、いや何も無いよ」

どうしました？　じゃねーよ!!

誰も見えてないの!!?

扶桑と山城の後ろに死神いるんだけど!!

典型的な骸骨姿の死神が巨大な鎌構えて睨んでるんだけどー!!

「そそそそういえば椅子とテーブルが粉々なんだけど……大丈夫なの？」

「はい大丈夫ですよ。ストックはありますので」

まあ何度も破壊しちゃうから倉庫に何十近くかストックしてるんだよね。

もう壊す前提で用意してるし。

「提督……大丈夫ですか？　機嫌悪くなったりとか……」

「い、いや大丈夫だよ。ほら、腕も回せるし問題ないよあはは……」

わざと屈んで顔を見ないで大和!!

谷間丸見えだから!!　大きな谷間出来てるからー!!

「はははは……っ!?!」

!!?



何か死神が大和の首に鎌構えてるんだけど？

え？ 何？ 殺すの？ 殺す気満々の？

流石にやめて？ それじゃR―15がいきなりR―18Gになつちやうからね？

「テートクウ!!」

「アバツ!!」

何かいきなり金剛が抱きかかつて後頭部ら辺が主に痛いです。

予備動作無しの抱き着きは流石に痛い。

「金剛お姉様！ 提督が潰れてしまいます！ 一回離れて下さい！」

「Nオデース!! 皆さんが提督の記憶を改竄しようと色々企んでるのは見え見えなんデ

スカラ〜!!」

言つとくけど金剛さん、貴方が一番最初に記憶改竄しようとしたのよ？

他人の事を言えなくない？

「え？ ど、どういう事なんだい？」

まさか比叡以外のここにいる全員がそんな事思う訳……

「な、何を言ってるの？ そ、そんな事する訳、ねえ？ 武蔵？」

「そ、そうだな。そんな事は……しない……」

お前らもうちよつと隠せよ!!! 企んでるの丸見えじゃねーか!!!



この二人は後で全力でフォローしてあげよう。

「おい二人とも……流石にそれはやめといた方がいいぞ。提督が不安がつているじゃないか」

「提督を不安にさせるのはいけませんよ？」

「怖いデース……」

お前らの企みが一番の不安と恐怖だよ!!!

「扶桑さん、山城さん、流石に危ないです。大丈夫ですか？ 包帯はありますか？」

「あるわよ。問題ないわ」

「いやありだけど？」

「提督も大丈夫ですか？」

こんな時でも霧島は平常心か……凄いな。

何とも思わずに平然と皆に親しく接している。

「う、うん……何とか……ありがとうきりし——」「ひゃん！」

あ。

立ち上がろうと霧島の手を取ろうとしたら思わず霧島の胸掴んじまった……。

しかもいい声上げたぞオイ。ラッキースケベってすげえな。

いやそれどころじゃねーわ。背後から殺気を感じる。

これ振り向いたら死じゃない？

死す？ 死す？ デュエルスタンバイしちゃう？

「ご、ごめん……霧島……」

「い、いえ……大丈夫です……アクセシブント、です……」

やばい、後ろ振り向けない上に霧島の顔も見れない。

さつきからプレッシャーと殺気が背中を凍りつくしてる。

「提督！ 私のも触って下さい！」

何かいきなり大和が胸触らせてきたわ。

感想だつて？

凄いです。

「毎日揉んでたじゃないですか……覚えていないんですか!?」

覚えてる訳ないだろ!! 初めて聞いたわそんな事!!

オイ今度は死神のカッターナイフが大和の傘になつてんぞ!!

死神もつと困惑してんじゃねーか!!! アイツだけあたふたしてんぞアレ!!

『コレドウヤツテ使ウノ……』

知らんわ!!! 俺に聞いてくるな!!!

「いやそれは私デース！ 勘違いしないでクダサイ!!」

今度は金剛の胸にイイイ!!!

無理矢理すぎるけど柔らかいイイイ!!!

ああ今度は鎌に戻ったアアア!!!

何か邪悪なオーラ発してんぞ!!

卍解だアレ!!

卍解する気だよ!!

何か構えてんもん!!

「大和……金剛……いくらなんでもやりすぎだ。提督が怯えているだろう」

武蔵いい……俺の顔を胸に押し付けられないでええ……!!

苦ぢいゝゝいゝゝいゝゝ!!!

「武蔵さん！ 提督が苦しそうです！ 一旦離してください！」

「おっと、それはすまない」

「提督大丈夫ですか？ セツ〇〇しましょう!!」

お前は一回黙ってろ!!!

あーもう死神が卍解しちゃったじゃんかああ!!!

黒い色の刀持って武蔵に向けてんぞ、やばいつて!!

「ああ………！ きつと私は提督に身ぐるみ剥がされて乱暴に身体を犯されるのだわ!!」

お願いだからもうちよつと自分の身体大切にしてエ!!!  
俺そんな事しないからあ!!!

あああああ死神が霧島の首に天鎖○月構えたあああああ!!!

ちよつと待って!!

分かった! 分かったから!!

もうこうなれば仕方あるまい……。

「ごめん……ちよつと疲れた……」

「提督! 大丈夫ですか?」

仮病でも使ってこの場を脱出しよう。

戦艦達の悩みやストレスはもう分かった。

見直しが必要になる、だがその前に一度脱出だ。

「ちよつと外の空気、吸いたいな」

「では外へ行きましょう」

ああやつと脱出出来た……。

霧島優しい。

## 5. ぐめんなきいって言ってるよね？

「提督……大丈夫ですか……？」

「う、うん。大丈夫だよ」

色々頭がおかしくなりそうな事ばかりでパンクしそうになった……。

流石につつこむのも疲れてきたよ……。

まさかここまで異常だとは思わなかった。

何かと不満が溜まってたんだろう。

色々と考えなきやね。

「案内続けますか？ それともお休みになれますか？」

「いやいや大丈夫だよ。また、案内お願いでできるかな？」

「そうですか……分かりました。次の寮へご案内致しますね」

さて次に向かうは駆逐艦寮。

小さな子から大きい子まで多種多様な駆逐艦や海防艦達が住んでいるんだ。この鎮守府じゃ一番人数が多いから寮内はかなり広く、そして戦術を学ぶ教室が多い。

だから見た目じゃ幼稚園だとか小学校とかに間違えられてもおかしくないんだよね。

因みに教えている先生は重巡洋艦達でローテーションで決めてるよ。

「ここが駆逐艦寮です。この鎮守府では一番人数が多いので少し騒がしいかもしれませ  
ん」

「そうだね。でもこういう騒がしいのは悪くないかな」

「そう言っていただけだと嬉しいです。騒がしい分、中身はいい子達ばかりなので一度  
触れ合っては如何ですか?」

触れ合う、かあ……。

いや何もやましい事は考えてないよ?

寧ろ考えたら犯罪じゃない?

俺は変態じゃないから分からないなあ。

「司令官だ!」

「司令官!」

「えっ!? 司令官ですか!」

「司令官か……」

俺に気付いてくれたのは元氣いっぱいな皐月、ほんわかしてる文月、きちんとしてる  
三日月、落ち着きのある菊月だ。

睦月型駆逐艦の娘達はどの娘も背が小さく、そして可愛い。



正直なところ、海防艦と朝潮型と睦月型は異性対象とは思えず、父性が出てしまう。一生愛でて可愛がつてあげたいのが素直な気持ち。

現に俺は囲まれてて幸せでございます。

え？ 前の朝潮達の件はって？

あれは例外。

「ボクは皐月だよ！ よろしくね！」

「あたしは文月だよ！よろしくう〜」

「三日月です！ これからまたよろしくお願いします！」

「菊月だ……よろしく、頼む……」

あつ、そういうえば記憶喪失の設定だから、皆自己紹介してるのか……。

本当にごめんよ。

「あはは……こんなに人気だったのかな……？ 前の僕は……」

「それは勿論！ 提督は駆逐艦達からかなりの人気を得ていますよ」

なるべく平等に仲良く接していたけど、この娘達は大丈夫みたいだ。

不知火とか朝潮達がちよつと心配ではあるんだけど。

「すいません提督、少しトイレに行かせていただきますね。皆さん、借りてもいいですか

？」

「うん！ 大丈夫だよー！」

「それにしても……髪の色が違うから分かりやすいな」

「……しかし、本当に記憶喪失だとはな……」

「本当に何も覚えていないだもんねえ」

「それでも私は司令官の後を追います！」

「まっ今の司令官もかわいいけどね！」

皐月の方が数十倍も可愛いよ。

「司令官、貴方は本当に記憶喪失なのか？」

ギクッ

「ほ、本当らしいけど……」

「誰から聞いたのだ？」

「不知火？ と金剛？ から……？」

「そうか……」

もしかして菊月が気付いちやったパターンか！？

いやいや待て、まだ怪しんでるだけだ。確信には至ってないはず。

「ならば今なら司令官を自由に出来る、という事か」

ん？

「そうみたいだね！ どうしようかなあー？」

んん??

「面白い事思いついちゃった……！」

んんん???

「駄目ですよ、ちゃんと考えなければ」

んんんん????

ごめん、さつきから嫌な予感しかしないんだけど。

自由出来る？ 何を？ 俺が？ 何するの？ 何されるの？

「ごめん………どういふ事かな………？」

「どういふ事って………秘密に決まっているだろう」

何故秘密なんですか!!!

「司令官、ちよつとこつちに来て来て〜」

言われるがままついていくしか方法は無かった訳ですが、ここは………睦月達の部屋か。

合計十人いるから部屋もかなり広い。部屋を囲うように二段ベッドが五つある。

「ここが私達のお部屋〜」

「睦月ちゃん達は遠征でいないけどね!!」

そうなのか。だから今残ってるのは皐月達だけらしい。

こりやまた個性の強い娘ばかり集まったもんだな。

あ、霧島さん置いて行っちゃった。

後で合流しないと。

「あれ？ み、三日月と菊月は？」

「え？ あれ本当だ、どこに行っちゃったんだろ……」

あれ？ 文月達でも分らないのか？

確かに後ろにいたはずだけど……。

「それよりも司令官！ 実は伝えなきやいけない事があるんだけど……」

「な、何かな？」

「私達とー……一緒にお昼寝してくれない、かな……？」

ふっ……もう俺は成長したんだ。

この事の意味ぐらいちちゃんと分かってるぜ、ソウルブラザー。

「お昼寝……？」

「うん……実は司令官が記憶喪失する前は私達とお昼寝するっていう決まり事があった  
ね」

いや何ですかその決まり事。

初耳なんだけど。こりやまた捻じ曲げて来たな？

「ダメ……かな……？」

「お願い……」

あああああああああ!!!

そんな綺麗な眼差しで俺を見ないで!! 何でも承諾しちゃうじゃんか!!

「う、うん……いいよ。一緒に寝ようか」

「本当? やったー!」

「流石司令官!」

まあこの娘達と一緒に昼寝するぐらいなら何も問題は無いでしょ。

睦月型の娘達とお昼寝する決まり事がある記憶を捏造してきたのは……まあ、とりあえず気にしない事にしよう。

「司令官の身体、暖かあい……」

「やっぱり司令官だと安心するなあ……」

「えーこちら司令官、こちら司令官」

「こちら脳内司令塔」

「こちら司令官。只今、二人の女神に挟まれ身動きが取れない。このまま潜伏を続行す

る】

【こちら脳内司令塔。了解、くれぐれも悩殺攻撃には気を付けろ】

さて……どうしたものか……。

小さな二段ベッドの下のベッドで寝てしまった訳だが。

しかも両腕に皐月と文月が抱き締めてきて身動きは不可能。

挙句の果てには両足は皐月と文月の足ホールドによって施錠済み。

……詰んだなコレ。

ダメだわ。

理性うんぬん寸前に無理ゲーと化してる。

正直な話、このまま寝るのも悪くはないな。

「うう……」

「むにやむにや……」

ちよつとお二人さん、流石に股を人の太腿に擦り付けて来るのはヤバイ。

これ足動かしたらどう反応するか……——、

「あつ……」

「んっ……」

はいアウトー。

どうやってもR—18展開ですな分かります。

睡姦とか俺は趣味じゃないんで。子供襲うとか大人としてどうかと思うわ。

因みに俺はどちらかと言うと寝てる間に襲われた（殴

つて言うのはとりあえず置いといて……あのー……。

トイレ行きたい。

いや寝る前は別に尿意は無かったんだけどさ、寝た途端に急に出てきたヤツ？

例えば朝、通勤したら家の中では便意は平気だったのに電車の中となれば急に腹痛が来て便意ヤバすぎワロタってなるパターン、みたいな。

まさに今そんな感じ。

かといってこの状況で動けば恐らく面倒な状況になるだろうなあ。

寝るか。

いつその事寝て、忘れようか——、

「寝たか……?」

「寝ましたね……多分」

おや? この声は三日月と菊月……?

何しに来たんだ?

「さて……どうする? どう司令官と○合まぐあう?」

ちよつと待て菊月イイイイ  
!!!?!

お前からそんな言葉聞いたの初めてだぞ!!

○合まぐあうって意味分かってんのか!! セッ○○だぞ!!!

よくそんな言葉平気で言えたな!!

だが待て。

三日月はこの事をちゃんと理解してるのか?

三日月って朝潮と同じで素がとても真面目だから、結構性知識が甘いところがあるし

……意味理解していない可能性が……。

「菊月姉さんが先でも構いません、しかし私も観察させていただきます」

もうお前真面目なのか変態なのか分かんねえな!!!

つか俺はトイレに行きたいんだよ!



この女神の拘束を外してくれ!!

「しかし行為の最中を見られるのは如何せん恥ずかしいぞ」

「その分菊月姉さんも見ていただければ問題ありません」

いや問題だらけだよ!! 何二人お互い見た事で恥ずかしさを打ち消しにしてんだ!!

「記憶を失う前は貴方が好きだと言う事を伝えられなかったから……」

菊月……。

そうなのか……ごめんな……。

お前の気持ちに気付いてやれなくて……。

「だから……私の心理めと同時に行為を激しくさせ、刺激を与える事で思い出させるしかない」

思い出させる方法がえげつな過ぎるだろ!!!

どこから教わったそんな方法!!!

「同じくです……あの司令官が戻るまでは私達が覚悟しなければ」

もつと他に思い出させる方法はあるでしょ!!

やめて!! 自分の身体は綺麗なままにしてえ!!! お願いだからあ!!

ああああもうトイレ行きてえよおおお!!!

かくなる上は……話しかけるしかない……!!

「な、何を考えてるのかな……菊月、三日月」

「司令官……!!? 起きてたのか……」

「寝ていたとばかり……」

「今の話は少しだけ聞いたよ……ごめんね、記憶を失ってしまつて……僕が不甲斐ないばかりに……」

「そ、そんな事は無いぞ司令官!」

「そうです!! ただ私達は……!」

「やめて」

「っ……!!」

「やめて。そんな方法で僕は記憶を思い出したくない、君達が無理して傷ついてまでやる事じゃないんだよ」

さつきまで寝てる間に襲われたいとか思つてた奴の言葉じゃねえよなコレ。

「君達の想いは十分に理解した。ありがとうね、こんな僕を好きになつてくれて。前の僕は相当愛されてたんだね……」

「それは勿論……!」

「みんな司令官の事を大好きですよ!」

何かシリアスみたいな状況だけど、今の俺は皐月と文月のホールドで拘束されてる且つ、寝ながら喋ってるからね。

傍から見たらシユール過ぎるよ。

「そうか……それが聞けてよかった。んじやそんな事はもうしない？」

「しないと誓おう」

「しません！」

「なら良かった、いい子達だね。菊月、もしかして寂しかったりした？」

「……恥ずかしいが……少し、寂しかった」

「三日月は？」

「同じ気持ちです……私も……寂しかったです」

「そっか。んじや今度からは暇な時に僕の事を直接呼んで？ 二人だけで色々しよう、

そしたら寂しさも無くなるでしょ？」

恐らく菊月と三日月はあまり俺と話す機会が無かった、いや最低限の会話だけ交わして自分に素直になれなかつたんだろうと思う。

その素直になれない気持ち溜まっていく中で、俺が記憶喪失になってしまった。

その溜まった気持ちが発して、このような結果になったんだろう。

「分かった……これからはそうする……」

「本当に……ありがとうございます……！」

もう一度言うけどさつきまで寝る間に襲われたいと思つてたヤツの発言だからね？ コレ。

しかも今の状況、皐月と文月に寝たまま拘束されて動けないからね？

こんな状況で何カツコつけてんだよ、俺の方が恥ずかしいわ。

しかもそれより……、

「よし！ んじゃこの話は終わり！ それに二人、ごめんんだけど……」

「何だ？」

「何でしょうか」

「今すぐトイレに行きたいんです……この二人を外してください……」

もう膀胱が破裂しそうですねですよ。

泣きたい。

## 6. ごめんなさいって言わなきやダメ？

私は加賀と言います。

日本の鎮守府のどこにでもいる航空母艦です。

かつては赤城さんと共に一航戦と呼ばれ、それなりに戦果を収めてきました。そして人の姿となり、今こうやって深海棲艦とかいう訳の分からない超生物と戦う羽目になっています。

って言うか深海棲艦って何？ 何で人類の敵とか言われてるの？ 何がしたいわけ

？ あんなの魚介類と一緒にじゃないかしら。捕まえれば大体大人しくなるでしょう……、

○されてもマグロ（殴

それは置いといて、正規空母の中では性能はとても素晴らしく、神の如き力と評価されてまして。各鎮守府では何故か最強の正規空母と勝手に呼ばれ、どこの鎮守府も重宝されている訳ですが。

いや実際最強ですし、四スロット積みれるし、元はと言えば戦艦ですし。

まあ何も文句の言いどころなんて無いと思いますが、一つだけ言っていていいとしたら……、

『あ、加賀さん。今度教えたいラーメ——』『死んでください提督』

『……ねえ何か酷い事したかな？ 俺……』

全く素直になれない事です!!!

いくら提督と話しても逆の事言ってしまうんですよ!!

本当は色々とお話したいのに、恥ずかしくて罵倒しか言えません。

だから感情とか表に出せなくて、周りからはクールな所がいいだとか少し見せるデレがギャップ萌えだとか言われて世間から凄い人気を得てしまいました。

いや人気なのは当たり前ですが、キャラが完成された所為でこのキャラを突き通す方法しか無かったんです。

でも私も感情を表に出したい!!!

思い切り笑いたいです！ 盛大に喜びたいです！ 普通の女子高生みたいに楽しくお喋りしたい!!

赤城さんや皆さんに隠れて表情を出す練習を重ねましたが、いざ実戦となると成果は

確認出来ず……挙句の果てには提督からはたまに避けられてしまう事があり……まあ私の自業自得ではあるんですが。

何度かイメージアップを図って試しましたが全てがダメでした……。

もう関係は戻らないんじゃないかと赤城さんに慰められる日々が続く中、ある一筋の光が私を差したのです。

提督が記憶喪失になった件について。

私は考えました。

提督が記憶喪失になった↓艦娘全員が初対面↓前の過去や印象は全て消えた↓つまり初対面から好印象ならば……!!

楽しくお話出来る！ そう思った訳です。

なので今度こそ私は本来の私をさらけ出し、提督と良い関係を保てる様にする!!

その為にはまず第一印象が大事！

身だしなみ完了！

サイドテール完了！

くせつ毛手直し完了！

——加賀、出撃します。

「あーさつきは危ない目にあつたなあ……やつと二人から離れる事が出来たけど、そのまま寝ちやつたし」

菊月と三日月が手伝ってくれたおかげで何とかなつたけど、皐月と文月は菊月達の企みを知らずにただ単に俺とお昼寝したかつただけらしい。

そこにちょうどよく俺が拘束されてる且つ寝てるから襲おうと考えていたとか。

まあ駆逐艦ながら凄い事考えるなあ。

「つて言うか霧島はトイレに行つたきり戻つてこないな……てかここはどこだ？ ん？」

おつ、加賀さんだ。珍しいな一人でいるなんて。

いつもは赤城さんと一緒に事が殆どなんだけど。

ん？ 加賀さんがここに居るといふ事は……ここは空母寮か。

加賀さんか……うーん何故か加賀さんには鬼の如く嫌われてるんだよなあ……何回も仲の良い関係にしようとして話し掛けてるけど酷い事言われてそのまま去つて行つちゃうし……。



赤城さんからは極度の照れ屋さんだから落ち込まなくていいって言われたけど……話し掛ける度に死んでくださいとか言われたら俺ショックだよ。

で、でも！ と、とりあえず反応を確かめよう。

「あ、あのー！」

「っ!？」

（声を掛けてもらった……！ 嬉しいわ……第一印象は大切よ加賀、可愛らしい笑顔でちゃんとした言葉使いを……！）

「お、おはようございます提督！ もうお身体はまだ死んで大丈夫ないんですか？」

「え??????」

（え??????）

（何やってるの私!! 罵倒と気遣いが混ざって日本語じゃない何かになってるじゃない!!!）

（ここはちゃんと訂正しなければ……!）

「(ゴゴゴゴ)めんなさい提督！ 今のはその……一航戦ジョークです」

「そ、そう……面白いですね、一航戦ジョーク……」

いや一航戦ジョークって何!?!

初めて聞いたよそんなジョーク!!

ビスマルクでもそんな事言わねえぞ!!

(ダメよ加賀、落ち着きを取り戻して! そうよまずは簡単な自己紹介から、自分をアピールするのよ)

「あ、あ! すすすいません! 申し遅れました! 私、航空母艦の加賀です! これからよろしくお願いしますね!!」

(よっしやああああああ!!! 上手く言えたわ!!!)

「う、うん。よろしく願います、加賀さん」

あれ? 加賀さんにしてはめちやくちや優しくくない?

見た事も無いくらいいの凄可笑顔だし、声がめちやくちや元気だし……、

え……? まさか……加賀さん……。

仲良くなったと見せかけて俺を殺すつもりなのか!!!? 【※違います】

(最初は少し手こずったけど、自己紹介は完璧だわ! でも何故かしら……遠く見られているような……)

(まさか……提督……!)

(私の素行が悪過ぎたから、解体宣告しに来たの!!!?) 【※違います】

「加賀さんは……その……とても元気なんですな」

わざと仲良くなって注意散漫な所を殺すつもりだ。

記憶喪失だとはいえいつも嫌われてるのにこの状況でこんな笑顔なのは逆に怪しい。

「そうですね！ 元はこんな性格なんですよ」

（解体されたくない！ もっとアピールしないと!!）

「実は私はとても強いんですよ。色々と……えーっと、こんな事とかあんな事とか……」

くっ！ 確かに加賀はとても力強い！

いざ抵抗しようものなら片腕なんて一捻りだ。

（あーもうこんな時に語彙力下がるんだから!! もっと言うべき事があるでしょう!!）

「あつ、戦闘面ではとてもお役に立てますよ!! 一人で何十人も倒した事があります！

あと……躊躇いもなく殺す事が出来ます!!」

一人で何十人も!!!?

しかも躊躇いもなく!!!?

そこまで俺が嫌いだって言うのか!!?

俺何か酷い事したの!?

酷い事したなら謝るからさあ!!

「そ、そうですか……それは凄い……」

（え!? あれ!? 反応が薄い!? 今のではアピールにならなかつたのかしら……もっと

アピールしないと！)

「じ……実際にやって見せましようか？ 良ければ……ですが……」

突然の殺害予告宣言んんんんん  
マジで殺す気じゃねーか!!  
!!!!!!

ちよつとは考え過ぎかなって希望的観測持ってたけど、もうその希望すら打ち砕かれたよ!!

「じ……実際にやって見せましようか？ 良ければ……ですが……」

とか言われたけど、本当は、

「今ここで殺してあげましようか？ 死に方やタイミングは貴方の自由ですよフッフッフ……」

って隠して言ってるに違いない!!

「い、いや……せめて全員の艦娘達と出会った後で……」

「はい！ 分かりました！ いつでも待ってますね！」

「いつでも殺せるんですからね……フッフッフ……」

としか聞こえようが無えええ!!!

(やった！ 約束出来たわ！ 後は私の実力を見せれば結果オーライね！ でも……もう少しお話ししたいのだけれど……)

くそっ……！

加賀さんがそこまで俺に嫌悪感を抱いていたとは……！

俺の所為だ、俺に原因があるんだ、俺自身が何とかする他ない！

とりあえず記憶喪失前のイメージを聞いてみよう。どこがダメだったか聞いて分かるはずだ。

「あ、あのー……加賀さんから見て記憶を失う前の僕ってどんな人、だったんですか？」  
(提督から!? 話し掛けてくれたわ……嬉しい！ え？ 記憶を失う前の提督？ うーん……)

「そうですね……」

(作戦指揮が素晴らしい事とか、仲間思いな所とか、一人一人ちゃんと接してくれる所とか、あーもう多過ぎてどれを言えばいいのか分からないわ！)

「おーい……加賀さーん……」

(でも待つて、色々と思いついたけどこれって褒め言葉では？ 実質、愛の告白になってしまうのでは？ ゆくゆくケツコンしてしまうのでは？ そして繋がってしまうのでは?)

「加賀さーん……大丈夫ですかー?」

(いやいや考え過ぎよ加賀。もう少し自分を見直しなさい。確かに私はとても綺麗でモデル顔負けの身体を持っていますが、提督の前では違うわ。提督はどの娘に対しても平等に接し、良い関係を保っているわ。その中でも翔鶴との仲が良くなり、挙句の果てにはケツコンしましたし。正直な所、悔しかった覚えはありますが)

「加賀さん!」

「はっ! すすすすすいけません……考え過ぎました……」

えっ、考え過ぎたって何?

そこまで俺悪い所あったの?

「記憶喪失前の提督でしたね……正直な所、色々と恥ずかしくて言えません……」

「え……何故ですか……?」

「その……」

(言うのよ加賀! 提督の事をちゃんと褒めるのよ! 罵倒は絶対に言っちゃダメ!

落ち着いて……言う……!)

「その……言う私が恥ずかしくて……一回死んでください……」

一回死んでください!!!

とうとう包み隠さず言い出したよこの娘!!

「ただだけ嫌われてたの俺!!」

「凄いなシヨックなんだけど!!」

(ああああああああ!!!) 思わず気が抜けて言っちゃたああああああ!!! 早く訂正したい!!)

「すすすすすいません提督! 今のは……その……一航戦ジョークです」

「また一航戦ジョーク!!?」

「そのジョーク、ツイッターだったら即凍結だぞ!!」

「殺意高過ぎだろ!!」

「ま、まあとりあえず……些細な事でもいいんです。知りたいんですよ記憶を失う前の僕のこと」

「些細な事、ですか……」

「そうそう、悪い所とかありましたか?」

「そうですね……仲良く接し過ぎな所とか、ですかね……」

「うーん何かちよつとリアルな所突いてきた〜!」

「仲良く接し過ぎかあ……皆とはちゃんと平等に接してきたつもりだったけど、扶桑や山城みたいに足りなかった一方で足り過ぎた艦娘もいたのか……」

「難しいなあ、艦娘とのコミュニケーション」。

「あと何回か赤城さんにセクハラを仕掛けた事ですね」

それについては本当に申し訳ございませんでした。

ほんの出来心だったんです。許してください。

「えっ、本当ですか……ごめんなさい……」

「今の提督に問い詰めても仕方ないので今だけは気にしません。だから元気出してくださいー！」

「よし！ これだけ言えば好印象なはずよ！ よくやったわ私！」

今思えばこれが嫌われてる原因だよな。

そりゃ殺意も抱くわけだ。うん……、

……いや納得してないでさっさと対策考えろよ。

「あ、ありがとうございます加賀さん」

「いえいえ大丈夫です……あらこれは……」

（これは……包丁？ 何故こんな所に？）

「加賀さん、どうしました……た……」

ちよつと待って。

何で廊下に包丁落ちてんだよ。

おかしいだろ、人だかりに落ちた財布じゃねえんだよ！



人殺せる刃物だよ!!

「いえ包丁が落ちていたもので……誰のものかと」

「こんな所にちようどよく包丁が落ちてるなんてラッキーだわあ……フッフッフ……ペロリ」

殺す気だアアア!!!

絶対に殺す気のみだアレ!!

今包丁舐めてたもん!! 蔑む目で見てたもん!!

(全くこんな危ない物を落とすなんて……誰かしら全く……あ)

「提督、お怪我は——」「ギヤアアアアアアア!!!」

「ええエ!? 何かいきなり叫んだアア!!?」(※加賀さんの台詞)

(どうして!? 声を掛けた途端騒ぎ始めたわ……この包丁がそんなに怖かったのかしら……)

「ギヤアアアア!!! ギヤア!! ギヤアアアアア!!! ギヤアアアアアアア!!!」

「どうしたんですか提督!!?」

(赤城さんだわ!!)

「とりあえず落ち着いて提督! どうしたのかしら……提督! 怖い物なんてありませんよ!!」

(サツと包丁を背中に隠したのは秘密)

「提督!!」

「ギャアアアアアア!!!」

「……ああもううるさいな落ち着け!!!」

「グフェ!!!」

(手刀で黙らせたーッ!!!)

——五分後。

「あ、あ……貴方は……!」

「赤城です。初めましてですね、起き上がれますか?」

「は、はい……」

とりあえず騒いで何とか殺されずに済んだけど……まさか赤城さんが来てくれるとは思わなかった……。

加賀さん……さすがに包丁持ちながらこつちに振り向くのは怖いよ……。

(提督は大丈夫なのかしら……私が包丁持ってたからかしら……謝りたいわ……)

「全く……いきなり騒ぐから驚いて来ちゃいましたよ。大丈夫ですか?」

「と、とりあえずは……」

「それなら良かったです。あ、加賀さん、提督が何故騒いだか分かったりします？」

（そ、それは……）

「実は……廊下に包丁が落ちていて……念の為に提督の身を案じたら……」

「ふーむなるほど……包丁を持ったまま振り向いてしまったと。こればかりは仕方ありませんね、不慮の事故です」

赤城さんのリーダーシップと言うべきか、人徳が凄いと言うか……何か惚れる人いるだろうなあって思った。

「でもこの包丁……誰が落としたのか……」

「あ、それ私です」

お前のかよ!!!

（お前のかよ!!!）

「いやー無くしたと思ってたんですよね。拾ってくれてありがとうございます  
♪」

いやいや何で落とした財布感覚で包丁落としてるの？

何で？ 何の為に？ 用途が分からないんだけど？

（思わず赤城さんにお前とか言っちゃったわ……気が動転し過ぎね。一回落ち着きま

しようか)

「え、えーつと赤城さん……何故包丁を……?」

「決まってるじゃないですか……殺る為ですよ……フツフツフツ」

こいつも殺る気だーツツ!!!

「へ、へえー……何を殺るのですか?」

「何も怯えなくても深海棲艦ですよ。これをこんな風にかけてヒョイツと」

そんなデカい包丁を投げナイフ的な感覚で投げるなよ!!!

「赤城さん……それって役に立つんですか?」

「いえ全く」

使えねえのかよ!!!

ただの無駄遣いじゃねーか!!

「赤城さん、包丁を持ち歩くのは流石に危ないかと……」

「加賀さん、やつぱりそう思います? 念の為に持ってたんですけど、百本ぐらい」

包丁どんだけ持つてんだーツツツ!!!

(包丁どれだけ持つてんだーツツツ!!!)

足元が埋まる程持つてお前の身体の中は一体どうなってるんだよ!! どこぞの

四次元ポケットか!!

(流石の私も知らなかったわ……!!　こんなに包丁を持ち歩いていたなんて!!　歩く殺戮マシーンよこんなの!!)

「いつ戦闘が来るか分からないので常備しました。あ、お二方、一本欲しいですか?」  
「いないよ!!」

(いないですよ!!)

「やだなあ提督う……そんな顔しないで下さいよ。ジョークですよジョーク、一航戦ジョークです」

また一航戦ジョーク!!?

それでお前ら騙せると思ってない!?

「あ、コレ取っちゃダメですよ」

取らねえよそんな殺意高いジョーク!!!

「赤城さんって面白い人ですね……」

「ええ……まあそうですね」

「いやあつい四時間前から記憶を失っていて、私にセクハラした事を忘れている様な人に言われたくありませんねー!!　あーはっはっはっはっはっ!!!」

盛大に笑って煽るの本当に好きだなこの人オオ……!!!

「これで本当は記憶戻ってましたーとかだったら一発ぶん殴ってましたね!!」

「えっ!？」

ヒエツ……恐ろしや赤城さん……。

「あ、これも一航戦ジヨークです」

ふざけんなア!!!

「そういえば不知火さんがいませんね? 確か提督の案内係を務めていたようでした  
が」

「不知火は遠征らしくて代わりに霧島さんが来てくれたんですけど、その霧島さんもど  
こかに行っちゃって……」

「あららそうですか。では加賀さんがご案内の続きをしますね。私はこれから行かなければいけない事があるので。加賀さん、大丈夫ですか?」

(赤城さん……! まさか私の気持ち……!)

「はい……大丈夫ですよ」

「では私はこれにて」

「赤城さん包丁片付けて!!」

## 7. ごめんなさいききなんめご

「で、では……私がご案内しますね、提督」

「は、はい……よろしくお願ひします」

色々とツツコミどころが多過ぎて、何が起きたのか忘れる所だったよ。

くそっ……どうなってんだこの鎮守府は……！

くそっくそっ……！

ごちやごちやし過ぎて訳分からなくなる!!

そういえば加賀さん、エライ変わりようだけど……。

あ、前の話で何か殺されそうだったんだっけ。

もうぶつちやけどうでもいいっすわ。

この照れ加賀さん見ただけでももう世界とかどうでもいい気がする。

……この世界、価値低過ぎね？

「提督、駆逐艦寮はもうご存知ですか？」



「あ、はい。先程霧島さんに案内してもらいました……そういえば霧島さんはどこへ……」

「私は見ていないので分かりませんね……案内ついでに捜索もしましょう！」  
めつつや感情豊かだなあ加賀さん。

さつきは殺されそうとか言ってごめんね。

（提督と二人きり……！ このチャンスを逃がすわけにはいかないわ！ ちゃんとアピールしないと！）

「ん……あれは……？」

何か遠くに見えてくる……あれは時雨達か？

「あつ提督……—ふっふっふっ……よくここが分かったね」

「私達に話し掛けるとは提督も墜ちたものつぽい……！」

「一番に気付けなかったのは重罪だよ！」

「全くお茶目な提督なんだから！」

「うう〜恥ずかしいです……」

何だ何だ、何が始まってるんだ。

何をしているの？

「」「我ら!! 白露型特戦隊!!」「」

それどつかで見た事あるポーズ!!!

リーダーが心と身体入れ替えちゃう奴のタイプだよ!!

(……ちよつとかわいい)

「おのれ提督、記憶喪失で私達の事を忘れるとは!!」

「これは重罪に等しいね!」

「万死に値します!」

「身の程を知れっばい!!」

「誰か止めて〜」

何か春雨だけ泣いてる……。

嫌々付き合わされてるなコレ。

「だ、誰なのか……名前を教えて欲しいんですが……」

「あ、私は白露型の一番艦の白露だよ」

「僕がその二番艦の時雨だよ」

「私が夕立よ〜」

「いや夕立が夕立っばい!!」

「いや私が夕立よ! 何よ『ばい』ってハッキリさせなさいよ!」

「夕立が夕立なの〜!」

「いや私が夕立〜！」

「いい加減にしてっばい!! 夕立が夕立なの!!」

「じゃ、じゃあ私が夕立……」

「「どうぞどうぞ」」

何やってんだよ!!!

「あ、ごめんね提督。色々立て込んじやって」

「い、いや大丈夫ですよ……えーっと、貴方が夕立さんで……貴方は?」

「私は村雨、白露型の三番艦よ。よろしくね」

「わ、私がその五番艦の……春雨です……!! よろしくお願いします!」

な、何でこんな事をするようになったんだ……この娘達は……。

前はこんな性格だったっけ? 俺が記憶喪失してるから変わっちゃったのかな。

「いやいやごめんね〜提督。これがいつもの会話だからさ〜」

いやそんな会話初めて聞いたんだけど。君達よく揃って執務室に来ては遊んでくるのにそんな会話なんて記憶に無いんだけど?

「そういえば提督は記憶喪失だったよね」

「そうね、やっぱ印象には残ってくれたみたい」

いやまあ、そんな事されたら誰でも印象に残るよね。

「加賀さん、提督の体調は大丈夫なの？」

「ええ大丈夫よ。心配する事は無いわ」

「何か加賀さん、雰囲気変わったかい？」

「あ、ほんとだ。何か変わってる」

（何か変わってるってド正直に言うわねこの娘達……）

「ま、まあ色々あるのよ。それで、霧島さんを見掛けませんでしたか？」

「え？ 霧島さん？ ー見てないなあ、私達さつき部屋から出たばかりだし」

「部屋を出た時にちようど提督と加賀さんに会った感じですよ……」

「んー……そうですか……ありがとうございます」

誰も見掛けてないのかあ。

んー何か怪しくなってきた。大和や武蔵、金剛の企みもまだ来てないし、そろそろ警戒した方がいいのかもしれない。

「何か提督が敬語って似合わないっぼい」

「私達に敬語はいらないよ、気楽に話して？」

「そ、それでーじゃなくて。分かった、ありがとうございます」

言っておくけど俺は今、記憶喪失のフリをしているんですよ。この演技力、素晴らし  
いとは思いませんか？

「何でそんなドヤ顔なのさ提督」

「あ、いや……本当に何でだろ……」

「無意識ですか……全く提督は、一番艦である私の事を忘れるなんてダメダメっばい!!」  
……っばい? 白露さん、夕立の口調伝染ってない?

「本当にだよ……忘れてるなんて一人だったら何してたか分からないやつばい」  
え? また、っばい?

っつて言うか時雨さん、お願いします。目のハイライト消さないでください。中指も立てないでください。俺の事見続けないでください!!!

「また思いつかせないとねっつばい」

ねっつばいじゃないんだよ村雨。無理矢理過ぎるっつて、不自然過ぎるっつて。

「何でこんな事に……っばい」

春雨は恥ずかしいなら言うのやめろよもう!!

「提督も色々事情があるんです。あまり責めないでっばい」

加賀さんまでエエ!!?

「でもどうして記憶喪失なんかになったんだい? と聞いても記憶が無いんじや聞いても意味無いか」

ネタばらしというか、明石と色々な交換条件を元に結託して俺が何かにつづかって気

を失った所に明石が駆けつけ、容態を明石が調べる事で記憶喪失のフリが出来ただけどね。

まあその明石本人は俺そっちのけでどっか行ったけど。

「そういえば大きいカブトムシを見たような気がするっばい！」

「大きいカブトムシ？ そんなのこの世界にいる？ 普通」

因みに気を失った理由は明石が開発した兜虫型非殺傷兵器、通称「あたしはカブトムシ」っていう変なネーミングセンスした兵器で強制的に気を失わせるモノでやられたんだよね。

まあ単なるリモコン操作の自立型スタンガンなんですが。

「何かの間違いなんじゃないの？ 大きなカブトムシなんている訳くない？」

「えーでも本当に見たっばい」

「見たのか見てないのかどっちかにしてよ」

「んじや見てなくい」

自由過ぎるよ、この娘……。

「でもこの前、提督の下にあるカブトムシは見た」

「!?」

「!?」



あ、風呂か。まあそれなら見られる可能性もある訳だ、うん。

……いや何で？

いつも風呂は一人なだけけど。

皆が就寝頃に一人で入ってるはずなだけけど。

いやだって仕方なく無い？

自室に自分の風呂無いんだよ？ こうするしか方法無くない？

「提督……って聞いても忘れてるから意味無いわね。夕立、いつ提督とお風呂なんて入ったの？」

「記憶を失う五日前ぐらいに、偶然提督がお風呂入ってる所見て、覗き見したっぽい」

何か視線感じるなど思ってたけど、犯人お前かよ!!!

「覗き見なんて駄目じゃないか夕立、そういうのは——」

そうだと夕立。時雨の言う通りだ——

「——僕も混ぜてよ」

ああもう言うと思った!!!



はあ……とりあえず注意だけしておこう。

(……少し混ざりたいと思つたのは内緒よ)

「だ、駄目だよ？ 覗き見なんてしちゃ。さっきのように誤解を持たれても困るからさ」

「そうだよ時雨。する時は白露お姉ちゃんに言わなきゃ！」

いや言わなくていいんだよ!!

何で白露まで混ざる気満々なんだ!!!

「ま、私は元々覗いてたけどね」

いや村雨、お前それ自慢する事じゃないから!!

明らか犯罪だからなソレ!!

「は、春雨だつて！ みみみみ見てましたよ!!」

いやだから春雨ちゃん、ソレ堂々と言える事じゃないんだつて!!

「提督のく太い○○○○はくカビだらけく」

ぶっ飛ばすぞ!!!

「ちよつと夕立、それは言い過ぎよ。提督のはそろそろ剥けてるわ」

生々しい事言わないで下さい死にたくなつてきます。

「つていうか何で皆、堂々と覗いてた事喋ってるっぽい？」

お前が最初に言い出したんだろうがアアアアアア  
!!!!!!

——二分三十四秒後。

「そそそそれでもやめてね？ 覗くのはさ……少し危ないからさ」

「そうよ皆、覗くのはやめにしなさい。提督に迷惑が掛かるわ」

（ここはすかさずフォローして好感度アップよ！）

「第一に覗く事自体、してはいけない事なのよ。私達艦娘といえど罪に問われる事なんて有り得ない事じゃないんだから、ね？」

「分かりました……」

「分かったばい……」

流石加賀さん……！

こういう場面でも冷静沈着に対処出来る所が羨ましいぜ！

「さあ皆、一度提督に謝りましょう。記憶喪失ではあるけど、きっと許してくれるわ」

「うん……提督、ごめんなさい」

「「ごめんなさい」」

まるで加賀さんが白露型の保護者みたいになつて……。

何か母性というか、親性という何かを感じる。

「まあ……色々僕は覚えてない訳だし、君達の事を忘れてしまった僕にも悪い所があるから、互いに帳消しして事で。だから頭を上げて？」

正直な話、覗かれた事に関しては怒るまでもない事だと思ってるし、皆がちゃんとい娘達だつてのは分かっているから普通に許せるよ。途中色々ツッコんだけどさ。

（とは言つたものの私も一回覗いたので謝らなきゃならないわ。記憶喪失なんて関係ない、今ここで謝る事に意味があるのよ）

「さて私も……一回覗いたのでここで謝ります、すいませんでした」

加賀さん?!!

（思わず囁んでしまった……）

「あれ、でもこれ記憶喪失してるから謝っても忘れるんじゃないか……」

「でも白露、記憶思い出しても今の記憶は残ってるから駄目じゃないかしら？」

「あ……そうだった……」

馬鹿だった……!!!

（馬鹿だった……!!!）

「だがそんな事だろうと私達は挫けない!!」

「だって僕達は!!」

「ギ○ユー特戦隊!!!」

もう言っちゃってんじゃねーかアア!!!

(もう言っちゃってるじゃないのソレ!!!)

「何がなんだろうと提督の記憶、この村雨達が思い出させてやるんだから!!」

「あの手この手で提督を目覚めさせてあげるよ!!」

「覚悟しておく事だっばい!!」

「司令官……その……頑張ってください!!」

「つて事で私達はこれから遠征だから!! じゃあね〜!!」

(白露型特戦隊はそのままどこかへ行ってしまう……)

「……提督……大丈夫ですか?」

「いやうん……大丈夫」

## 8. いさなんめごめんなさい

「そういえば提督、工場には行きましたか？」

「こうしよう、ですか？」

「はい。建造や装備の開発、また私達の艦装のメンテナンスなどをしてくれる場所ですよ。ご案内致しますね」

ああそういえば工場にはまだ行ってなかったなあ。

途中まで色々ありすぎて案内されてる事なんて忘れてたし。

にしても、笑顔満開の加賀さんがこんなにも可愛いとは……。所謂ギャップ萌えとやらだろうか。

普段はクールだった分の反動というか、何かしらが跳ね返って来たのかな。

「ここが工場です」

いつも通り大きいなあここは。

妖精さん達が小さな身体でせつせと働いてる姿は可愛いし、ありがたみしかないなあ。

「あれ提督、どうしたんですか？」

「おお明石——ブフォ!!!」

「ええ何かいきなり吐血したあ!!?」

危ない……思わず明石の名前を言ってしまう所だった……。

俺とした事が陽炎や不知火と同じ過ちを犯すところだったぜ……、

……まあ記憶喪失のフリをしてる時点で過ちを犯すもクソも無いんだけどさ。

「ちよつとごめんなさい加賀さん、待っていただけですか？」

「え？ あ、はい……大丈夫ですよ」

明石が俺の肩を掴んで、加賀さんに聞こえないように話し掛けてきた。

「……何があったんですか……!」

「記憶喪失のフリしてるのは分かるだろ？」

「ああそうでしたね。ただ私達の反応を確かめたいだけの下水道の壁の汚いシミに匹敵する程のドブに棄てられてもおかしくないゲス野郎の考えですが」

「ねえそこまで酷い事言わなくてもよくない？」

(長いなあ……二人共……仲が良いのかしら)

「んで、思わず名前を呼びそうになったと……前例ありますよね？」

「はい……あります……」

「はあ……分かりました。一時的に演技してあげます、元はと言えば提督と私が起こした事なので」

「にしたつてあのスタンガン普通に痛かったぞ」

「大丈夫です。短時間で人が死なないようにには設計してます」

「えっ、それつてどうゆう——」「はい！ 終わりました！ 時間かけてすいません加賀さん！」

（あら終わったみたいね、何を話してたのかしら。気になるわ）

「何を話してたのかしら？」

「色々ですよー！ 色々！」

「そそそですよ加賀さん！ 駆逐艦の娘達の事について教えてもらっただけです！」

これで明石呼んだこと忘れてくれないかな……。

「そ、そう……まあそれはいいけど、さっき何故明石さんの名前を呼んだのかしら？  
まあ無理ですよねー。」

「そそそそそういえば本当に何故でしょー、何かふわつと出てきたんですよねー」

「うわあ……」

明石、確かに引くほどの棒演技なのは見てわかるけどあからさまに反応しないで。

「成程……そういう事もあるんですね……っ!?」

「っ!? どうしました加賀さん?」

「いや貴方の後ろに……何かいるんだけど……」

ん? 明石の後ろに?

「ああこれですか……あ」

あつ、てこれ俺の記憶喪失にさせた原因の兜虫型非殺傷武器「あたしはカブトムシ」  
じゃん!!!

何で隠してないの明石イイ!!?

「あははははー、何ですかこれー、いつの間に作つたんですかねー?」

お前も余っ程の棒演技だなオイ!!!

人のこと言えねーぞお前!!!

「これがまさか、提督を記憶喪失にさせた原因……! 明石……」

「いやいや私は知りませんよ!? 元はと言えばこの男が——」「那っ珂ちゃんだよー☆」

((What?))

「カブトムシだと思つたー? ざんねーん、正解はカブトムシ型の着ぐるみを被つた那

珂ちゃんでしたー!!!」

「……」



(……)

……。

「え、ちよつと待つて。何か悪い事した？ 待つて、待つて、無言で近付かないで？ 分かった、分かったから！ 謝ります、ごめんなさい！」

「那珂!!」

「ひゃい!!」

「……よくやった……!!」

「何で私褒められたの!!?」

「那珂さん……」

「は、はい……明石さん……?」

「何いつちよ前に私を驚かそうとしてるんですか、ぶっ〇しますよ」

「何で!!? 騙しただけで何でそんな事言われるの私!!!?」

「那珂……」

「は……い……?」

「貴方が提督の記憶を失わせたのね……!! よくやつ、許せないわ!!!」

「今なんて言った加賀さん!!?」

(思わず口に出てしまったわ……気を取り直さないと)

「失礼、少し気が動転してたわ。那珂、貴方では無いのね？」

「あつたりまえだよ？ ったく、これだから年上の空母は——」「提督、今すぐ海に沈めていいかしら」

加賀さん、那珂ちゃんにヘッドロックかけるのはやめてあげてえ!!!!

「加賀さん、それはやめてほしいかなー……なんて……」

「……分かりました」

「解体ですね、こんな小娘は」

「ええ!? 何で!? 悪かったって! ごめんなさい!! 那珂ちゃん、可愛くてもしませんから!!」

「明石さん……それはやめた方がいいんじゃないかと……（解体はやめろ!! 解体は!!）」

「（ここぞとばかりに演技してますね……この男は……）じゃあ分かりました、慈悲を与えます」

「え!? ほんと!？」

【①解体する】

【②解体する】

【③解体する】の中から選んでください」

全部解体だけじゃねーか!!! 慈悲もクソも無えなオイ!!

「あ……えーと……四番で!」

ほらもう現実逃避しちゃったじゃん!!

目が虚ろだよ、光が無いよ!!

お先真つ暗だよ!!

「四番ですね。ではカブトムシで」

どういう事!!?

「まずこうやって」

「へ? グフツ——」

殺人現場——!!!

警察と憲兵を呼べーツ!!

事件は鎮守府内で起こりましたー!!!

「あ、あの……明石……?」

「ん、大丈夫ですよ。死にはしません」

「お前の言葉が信用出来ないんだけど!!!」

「まあまあ見ててください。この那珂さんを近代化改修装置に入れて、つと」

「ああ那珂ちゃん!!!」

〔近代化改修装置に入れて何をするのかしら……〕

〔一回こねくり回します〕

〔こねくり回す!!? 一体何やってんのこれ!!〕

〔次に特製オーブンで膨らませます〕

〔オーブン!!? 初めて聞いたわよそんな物!!〕

〔那珂ちゃん!! 那珂ちゃんがああ!!〕

〔焼き上がったら一回冷やして、もう一回オーブンで焼き上げます〕

〔那珂ちゃんああああああんんん!!〕

〔はい、出来ました……とても素行が良くなった那珂ちゃんです〕

〔川内型軽巡洋艦の三番艦、那珂です。改めてよろしくお願いします提督〕

〔いや何があった——!!〕

〔いや何があった——!!?!!?!!〕

〔那珂ちゃんおかしくなってるない!? めちゃくちゃ真面目だけど!〕

〔私はいつでも真面目ですよ、貴方達と違って〕

〔ああでも一言余計な性格は変わってなかった!!〕

真面目な那珂ちゃんは……何か違う!

何か違うんだ! 何かこう……元氣溢れるようなパワーを持ったような……

「——ああ、バカつてことツブフェ!!!」

(いやまあ……殴られて当然よね……)

「はあ……明石、これ大丈夫なのかしら?」

「大丈夫じゃないんですか? 素行も良ければ余計な性格も直りますよ」

「一言余計だなんてそんな……そんな訳無いじゃないですか。私はこれでも貴方達と違つて真面目にしてるんですよ!」

「それが一言余計なんだよ!!!」

「それが一言余計なのよ!!!」

「明石!! 流石に戻してくれ!! カブトムシの着ぐるみ着たまま真面目な那珂はシユール過ぎてツツコミきれない!!」

「えー……」

あからさまに嫌な反応するなお前!!!

「はあ……じゃあ分かりましたよ。ほれ」

那珂ちゃんがまた近代化改修装置に入れられたな。

よし、これで戻つただろう。

「んじゃこれでどうですか?」

「何かカブトムシになつてる——ツツ!!!?」

「何かカブトムシになってるーーツ!!??」

「もう那珂じゃないじゃん! カブトムシじゃん!! 虫だよ!! 人から虫になっちゃったよ!!! 人類退化だよ!!」

「名前は那珂ブトムシです」

「上手くないわア!!!」

「その話は聞かせてもらいました」

（あれは……大淀さん……っていかその話ってなに!!?)

「明石さんが提督とカブトムシのBL本を作ろうとしていた話は聞き込み済みです」

「いやホントにどんな話!!!?」

「って言う前にも何故那珂さんさカブトムシに?」

何でこのカブトムシが那珂ちゃんだって分かるんだ大淀さんは……。

「私が近代化改修で変えました」

「そうですか。さて先程の話ですが——」「いやスルーしないで!!! 割と重要な話だよこ

れ!!!」

「黙りなさい!! 今は提督とカブトムシのBL本の方が重要です!!」

「アンタの着眼点どうなってるんだよ!!!」

「アンタの着眼点どうなってるのよ!!!」

大淀さんまで変わっちゃまって……。  
どうなってるんだこれは……。

## 9. ごめんこうむる

大淀さんまで変わっちまったよ……。

一体どうなってんだこれは……!!

那珂ちゃんもカブトムシになっちゃったし、あーもう情報量が多過ぎる!!

「あ、申し遅れました提督。私は大淀型軽巡洋艦一番艦の大淀です。よろしく願います」

「は、はあ……よろしく、お願いします……」

大淀さんの突然の登場と性癖暴露で強烈な印象が残ってしまっている自分がいる……。

もう何もかも変わっちまったよ……大淀さん。

「で、何故那珂さんはカブトムシに？」

あ、着眼点戻った。

「実は明石さんが何かやらかしてしまっただすね……」

「近代化改修装置に入れたらカブトムシになってしまいました」

って言うか装置に入れたらカブトムシになった、って初めて聞いた人からしたら意味



分からない台詞だよな。どんな仕組みしてんだこの装置。

「成程……元には戻せないんですか？ 明石さん」

「いつでも戻せますよ〜」

「なら後でいいでしょ——」「いや良くないでしょう!!!」

流石の加賀さんもツッコミせざるを得ないよな。

「今すぐ戻しなさい！ 艦隊に支障が出たらどうするのよ」

「そうだそうだ!! 言ってやれ加賀さん!!」

「でもカブトムシだったら自由に空飛べますよ？ 艦装も展開出来ますし、ほら」

「はア!!!」

「何でカブトムシが艦装を展開出来るんだ!!!」

「足に魚雷発射管ついてる上にツノには砲塔あるんだけど!？」

「いやいやいやいやハッピーニューイヤー。」

「どんな姿だろうと皆は人の姿をした那珂ちゃんが好きなんだ。変えてもらわないと困るよ明石さん。」

「んん……それはそれで……」

「加賀さん!!!?」

「何で決心揺らいじやったのかな!!!?」

確かに戦闘じゃ面白いかなって思ったけど流石カプトムシは駄目でしょ？  
で何言ってるか分からないし!!

無機質

「よすまれ喋は私」

「何つった今!？」

「私は喋れますよ、って言ってますね」

「却下!! 上官命令だ!! さっさと戻せ!! このマッドサイエンティスト!!」

最初からこうすればよかったんだよ全く……。

「えーまるで私がマッドサイエンティストみたいな扱いが腹立たしいんですけど」

「お前のその被害妄想が一番腹立たしいよ!!」

「えーだったら分かりましたよ。後で戻しておきますよ。コーカサスとかヘラクレスとかでいいでしょ、うるさいなあ」

「いや全然よくないわよ!! 寧ろよくない方向に行ってるじゃない!!」

「ではいつその事カプトガニというのはどうでしょうか」

「もう虫じゃ無いじゃない!!! 生きた化石よ!! 絶滅危惧種よそれは!!!」

「いたり戻に姿の人は私」

「何て言ってるか分からないから却下!!!」

「でしたらカプトサンゴでも——」「大淀は一回黙ってて!!!」

(ツッコミきれない……息が荒くなってきたわ……)

こいつら……途端にボケまくりやがって……。

ツッコむこつちの身にもなれよ……！

「……」

「はあ……はあ……」

「……兜割り、なんちって」

「ぶっ飛ばすぞ!!!」

——五分後。

「はいはい分かりましたから……！・ 今やりますよ」

那珂ちゃん(カブトムシのすがた)がまた近代化改修装置に入れられたぞ。

これで那珂ちゃんが帰ってくれるに違いないな。

でも虫から人って都合よく出来るものなのだろうか……そんな科学力……まさか……？

(人間に戻せるとはいえ、どんな科学力があればそんな事出来るのかしら……まさか……)

「○チスが全てを操っていた???」

「何言ってるんですか貴方達は」

「いやでも都合よく変えられるって普通に考えたらヤバくないか?」

「まあ言われてみればそうですねけどあまり深くは考えない方が身の為ですよ提督。あ、出来た」

レンジでチンしたみたいに言うな。

「はい、那珂ちゃんが帰ってきましたよっと」

「やつほー! 戻って来れたよー提督ー!」

良かった……やつと普通の那珂ちゃんが帰ってきてくれた……。

これで那珂ちゃんが酷い目に会わずに済むだろう。

「大丈夫かしら那珂? 身体の調子とかはどう?」

「バッチグーよ、加賀さん! 今でもアイドル活動が出来るんだから! しかも……」

「」

「しかも?」

「………翼、手に入れちゃったの!」

「羽生えてるー!」

「羽生えてるー!」

「何でそんな事になったの!?! 前から見たら何も変わらないのに、後ろにカブトムシの羽ムシの羽シが過カブトムシぎる羽ムシ」

生えてるぞ!! どういう事だよ!!」

「あー失敗しちゃいましたね。たまにあるんですよこういうの」

「いやたまにあるって何!? たまにあっちゃ駄目だろコレ!!」

「それがですねー、提督が記憶を失った事をキツカケに自分の容姿を変えようとする艦娘が現れましてね……例えば大淀さんなんかは腹に子を添えようと腹を自由に膨らませる能力を身につけましたよ」

「何だよ腹を自由に膨らませる能力って!!」

「妊婦、とかになって騙したかったんじゃないですか? ほら艦娘って子供産めませんし、そこから辺不都合なので」

「確かにそうだけどそんな能力使って俺の記憶を捻じ曲げたいのか!」

「だって龍驤さんなんて提督の記憶を捻じ曲げようと胸を大きくさせる能力を持ちましたし」

「欲望に忠実過ぎるだろ!! そんな都合良い能力があつてたまるか!!」

くそっ……!! 明石があまりにも強過ぎる……!

「とにかくだ!! その前に那珂ちゃんを元に戻せ!! 話はそれからだ!!」

「えー、これ結構しんどいんですよー? またやるんですかあ?」

「お前がこんな事しなきゃ二度やる事は無かつたんだよ!! さつさと元に戻せ!!」

「分かりましたよ、やりますから。大声出さないで下さいよ、うるさいなあ」

「ああそうだよ、やりやあいんだよ。早く戻すんだ！」

(また那珂が近代化改修装置に入れられた……)

「はい、戻しましたよ」

「ばぶう」

「戻り過ぎだよ!!!」

「グフェ!!!」

(ジャーマンスूपレックスウウ!!!?)

「誰が赤ちゃんにまで戻せつったよ!!! 一から人生やり直せつてか!! 戻り過ぎなんだよこの馬鹿!!」

「あーすいません調整ミスりました。もうジャーマンスूपレックスは勘弁してください

いよ、痛いんですよこれ」

「ちゃんと戻せばいい話なんだよ! わざわざ面倒な真似をするな!」

「分かりました、分かりましたから。今度こそやるんで許して下さい提督」

「ああそうだよ早くやれ!」

(ああまた那珂が近代化改修装置に入れられた……)

「これで大丈夫だと思います」

「……」

「棺桶じゃねーかアア!!!」

「グハアア!!!」

(リアアツトオオ!!!)

「棺桶の状態で出て来たよ!! 戻すどころか先逝ってんじゃねーか!!! 話すことすらま

まならないよこの阿呆が!!」

「すいません、また調整ミスりました……リアアツトは勘弁してくださいよ、これめっちゃ

くちや痛いので」

(本当に痛そう……)

「こ、今度こそ成功させるんでやめてください提督。さもなければ貴方を消します」

(何か凄いこと最後に言い出した!!)

「ああそうだ、必ず戻せよ」

(ああまたまたまた那珂が近代化改修装置に入れられた……)

「出来ました」

「指揮官、初めまして！ 軽巡洋艦の那珂です！ お姉さん二人ほど有名じゃないけど、いつか絶対に超えてみせますよ！」

「別物じゃねーかアア!!!」

「グワアア!!!」

(バックブリーカー!!!)

「もう別次元の存在出てきたよ!! 人でも何でもないよケモっ娘だよ!!! 性格が誠実

過ぎて前見えないよこのクソが!!!」

「最後の悪口だけどんどん悪くなるわこの人……」

(明石が腰を抱えて苦しんでる……)

「ねえ明石、その装置は貴方でも調整難しいのかしら？」

「そりゃ難しいですよ。調整の具合として一から五までの値があるんですが、例えると一が赤ちやんだとして二が老人です」

「極端過ぎるでしょ!! 一から二までの間に何があつたのよ!!!」

「『人生』……ですかね」



「いやいやいやそんな事聞いてないわよ!!! わざとらしくインタビューみたいに答えな  
いで!!!」

「だ、だったら明石。三、四、五は何があるんだ?」

「え? 三、四、五ですか? そうですねー……」

(え? この間は何なのかしら。明石が急に確かめたのだけどまさかこの娘、それほど把握していないのでは……!?)

「えーつと……あ……」

『あ』  
????

「……」

「……」

「……えーつとですね、三が——」 「いや今の間は何!!!?」

「どーみても何かあっただろ!!! やっちゃいけない事絶対やっただろお前!!!」

「いえやってません。仮にやったとしてもそれは私ではありません」

「台詞が無茶苦茶なんだよ!!! この状況でお前以外に誰がいるんだ!!!」

『川内』……ですかね……」

「いやいやいや語呂だけで選ぶなよ!!! 川内なんも関係ねえじゃねーか!!!」

「あーもう分かりましたよ、教えればいいんでしょう? やればいいんでしょう?」

「ああそうだよ早く言え！」

「那珂さんが元に戻りました」

……。

聞き間違いだろうか。今さつき明石は「元に戻りました」と言ったような気がするぞ。  
少し踊らされてるな俺……今は冷静に落ち着くべきだ。

「戻ったのか？」

「はい元には戻りました」

「え？ 本当に戻ったの？」

「はい加賀さん、戻りましたよ」

「いいじゃんか。さっさと出してやりなよ」

「分かりました」

何だよ戻ったなら戻ったで良いじゃんか。

何が『あ』だよ、驚かせるなあ全く。

「はい、1/350になった模型の那珂さんです」

「人じゃねーだろうがアアアア!!!」

「ドフェ!!!」

(ドラゴンスクリー!!!)

「今まで見た中で一番驚いたよ!!! 何だよ模型の艦って!! モノ化してんじやねーか!!!」

「すいません……三が模型だったので、つい回してしまいました……グツ……」

「三が模型ってどういう事!!!? めちゃくちゃ要らない機能じゃねーか!!!」

「いえ……艦娘の皆さんが提督からもらった物を模型化しようとするので、つい作っちゃいました」

「だからって何で模型化なんだよ!!!」

「それだけ皆さんが大切にしたいって事ですよ。ほらこの前だって長門さんが提督からもらった勲章を模型化しに来ましたよ」

「いやそれ模型化しちやダメなヤツだよ!!! なに勝手に模型化してんだアイツ!!!」

「先週は阿武隈さんが改装設計図を模型化してました」

「いやだからソレ模型化しちやいけないヤツ!!! やつこの思いで手に入れたんだぞ模型化するなよ!!!」

「金剛さんなんて提督の下着を模型化してコレクション化されてますよ」

「金剛オオ!!!」

「あ、因みに四は食べ物化。五はお金化です」

何かちよつとだけ五は有能だなあこいつ……………!

こういう所あるから憎めないんだよなあ……………。

……………後で俺も換金しよ。

「で、戻しますか? 那珂さんを」

「ああそれだ! 早く戻してくれ!」

「分かりました、ソレ渡してください」

那珂ちゃんの事をソレって言うな、人間だぞ一応は。

「0. 1 調整でやらないとダメなんですよコレ」

「何でそんな難しくしたんだよ……………」

「私の所為では無いです。全ては大本営が悪い」

「それは分かる」

(私も分かる)

「出来ました、これで大丈夫だと思えます」

「やつほー! 色々あったけど戻ってきたよー!」

「良かった良かった、これで戻ってきたよ」

「あ、カブトムシも出てきました」

「  
何  
で  
!!!?  
」

# 10. すいませんでした

私は浜風と申します。

陽炎型駆逐艦十三番艦で鎮守府の為に遠征任務をやっていました。

私が旗艦となり、五月雨さん、電さん、漣さん、川内さん、神通さんと共に動いています。

資材調達も無事終了し、これから鎮守府に帰還する予定です。

「こちら第四艦隊旗艦浜風、もうすぐ鎮守府に到着します」

『浜風さんですね。お疲れ様です、鎮守府に到着次第、報告書を提出してくださいね』

「あれ？ 提督じゃないですね……翔鶴さんですか？」

『はい、私が代わりに務めています』

「そうなんですか……提督はどうかされたんですか？ 緊急の用事とか？」

『あー……えーつと……その……』

「……？ どうされました？」

『えーつと……提督が突然窓を突き破った巨大なカブトムシに頭をぶつけられて記憶喪失になりました』

「どゆこと?!?!」

「うわっ!! びっくりした」

「何ですかそれ!!? どういう事ですか、意味分かんないですよ!!!」

『いや、私にもよく分からなくて……』

「情報量多過ぎて理解出来ませんでしたよ!! 何があつたんですかホントに!!!」

『私もお手上げ状態なんです……』

「お手上げ状態って!! あまりにも非現実的過ぎますよ!! 何ですか、巨大なカブトムシって!!」

『いや何故か巨大なカブトムシが突撃して来て……本当に私も訳が分からないんですよ』

「え、そんな……記憶喪失って……」

提督が記憶喪失……つまりは私達との思い出は全て水の泡、という事ですか。

……ツライですね。

簡単に言われましたが、単純に考えればとてもツライモノです

記憶を喪失した理由がインパクト強過ぎて、悲しい雰囲気無しですけど。

『悲しい事ですが……本当です……』

「……仕方ありません、記憶喪失したならまた蘇るかもしれませんし」

『あ、その事なんですが……』

「はい、何でしょうか？」

『浜風さんも記憶を捏造してセクハラとかしませんよね？』

「何言い出してるんですか翔鶴さん!!! そんな事しませんよ私は!!!」

『いや提督が記憶喪失してから皆さんが記憶を捏造しようと色々色仕掛けを仕込んできておかしくなってるんです』

「ええ……そんな事を……」

『駆逐艦なのにも関わらず胸が特別大きく艦装の紐でその胸を深く強調し、真面目な性格でありながらスカートとタイツで絶対領域を見せつける浜風さんならして当然かなと』

「酷い言われようですわね私!!! そこまで煩惱じゃありませんよ!!!」

『更には秋季限定グラで鎮守府の秋祭りの為にわざわざ白い浴衣を着ては焼きトウモロコシと綿飴を手に持ち、如何わしい焼きイカを口に啜えて提督を誘惑しようと思いましたよね』

「如何わしいのは貴方ですよ!!! 一体何食えばそんな考え方になるんですか!!!」

『あ、私は綿飴食べました』

「綿飴食べて頭フワフワになっちゃったのかな?!?!? でも仕方が無いじゃないですか!!!」



行きたかったんだもん秋祭り!!!」

『挙句の果てにはバレンタイン専用衣装では黄色のスカートとエプロン姿で生真面目だけど家庭的な後輩感を醸し出し、中破姿は涙目になりながらも健気に提督へ渡そうとする姿が目送られてましたよね』

「すいません翔鶴さん！ 何か私に恨みでもあるんでしょうか!!!」

『浜風さんまでおかしくなったらもうお終いですよこども』

「貴方が一番おかしい時点でこの鎮守府の終着点丸見えですよ!!!」

『まあでもとりあえず鎮守府に着いたらそんな事はしないでくださいね。浜風さん事以外なら何とかありますが、もしした場合に許せませんし、それ以上に私の悪口は許しません』

「私に対する悪口はどうでもいいって言うんですか!!! いい加減にしないとフワフワしたその頭燃やしますよ!!!」

『すいませんすいません、とりあえずそういう事はしないように呼び掛けてくれませんか？ 私だけではどうにも止めれなくて……』

「……分かりました。帰還したらやってみます」

『ありがとうございます！ では気を付けてくださいね』

「はい、分かりました」

——六分後。

「はあ……ツツコミ過ぎて疲れました……一体どうなってるんですかここは……」

「んー提督が記憶喪失かあ……あまりにも非現実的過ぎて実感湧かないなあ」

「ご主人様が記憶喪失……閃いた！」

「はわわわ！ 駄目なのです漣ちゃん！ 浜風さんや翔鶴さんからそんな事はしないようにと注意されたばつかなのです！」

「司令官が記憶喪失……そんなあ……」

「とりあえず確認だけしましょう皆さん。開けますよ」

色々言いましたけど実は提督の事が心配だったりします。

今は執務室のドアまで来ましたが、提督の反応が怖くて少し身体が震えてたりしてますね……。

はじめまして、とか言われたらショックの衝撃がデカイです。

それなのに皆さんといったら、無理矢理記憶を捻じ曲げようと様々な手で仕出かそうとしてるなんて……それだけ提督の事が好きだったという事でしょうか。

……少し分かる気もします。

「失礼します提督」

とはいえ私は提督が記憶喪失したとしてもそんな事は絶対にしません。  
どんな事だろうと提督を正しい方へ導いてみせます。

その為にも――、

「第四艦隊、遠征任務から帰還しまし――」

「もつと！ もつとだ翔鶴!!! もつと俺を縛り付けてくれええええ!!!」

「は、はいいいい!!!」

……。

「おー き、君は誰か――」 「何やってんだコラアアア!!!」

「蹴り飛ばしたー!!!」 「!!!」

「一体何やってるんですか二人共!!! 執務室でSMプレイなんて聞いてませんよ!!!  
そういうのは他所でやってください!!!」

「いやお前には何も言っていないんだけど……」

「別の場所ならいいんですね……」

「何でこんな事を！ まさか翔鶴さんまでも変わってしまったんですか!!!」

「い、いえ……提督が亀甲縛りすれば何か思い出すかもしれないと言ってたので、いつも  
のように……」

「思い出す方法が亀甲縛りって普段から貴方達どんなプレイしてるんですか!!! いい加

滅にしないと張り倒しますよ!!!」

「ま、待ってください! それより君は誰なんだ!? 後ろの娘達もよく分からなくて……!」  
「私は陽炎型駆逐艦一三番艦の浜風です! そして後ろにいるのが川内さん、神通さん、漣さん、電さん、五月雨さんです!!」

「よ、よろしくね提督……」

「よろしく願います、なのです……」

「よろしく皆! ところで何でそんなドン引きした表情なんだ?」

「貴方達が先程醜態を晒したからでしょう。亀甲縛りなんて普通はしませんよ」

「でも何で、は……えーつと、は……ハメ風だっけ?」

「ハメ風って何ですか!!! はま風です!! 間違えないでください!!!」

「そうそう浜風、何で亀甲縛りが分かるんだ?」

「それは……」

……。

何ですか、知ってちゃ悪いんですか。

私だって色々知るお年頃なんです、それぐらい気になっちゃいますし、嫌でも知ってしまおうんです。

「やっぱハメ風だな」

「ハメ風ですね」

「ハメ風だなあ」

「ハ、ハメ風なのです……」

「あーもう感染してく!!! やめて恥ずかしいからあ!!!」

そんなド淫乱な名前で呼ぶのは嫌だああ!!!

「あー知ってますよ!! 悪いですか知ってます!!」

「いや別に。初めて見た時は真面目そうだなと思ってたけど、今のを聞いて浜風もお年頃なんだなと感心しただけだよ」

「明らか私の事からかかってますよね……!!」

「何を言ってるの浜風。提督は記憶を失くしているのよ、ただ純粹に聞いただけ」

この声……まさか！

「居たんですか加賀さん！」

「いたわよ、さつきから」

「加賀さん、どうしたんですかこの人達は！ あまりにも変わり過ぎでしょう!!!」

「仕方の無い事よ、記憶喪失した事に皆気が動転してるだけ。心配いらぬわ安心なさ

い……提督！」

「ん？ ああそうだな」

「ねー!!」

「加賀さん!!!?」

あの加賀さんまでおかしくなってる……だと……!?

そんな馬鹿な事が……あるのでしょうか……。

「だ、第一!」 記憶を失った理由があまりにも非現実的過ぎますよ!! 本当なんですか

!?! 突然巨大なカブトムシが襲ってきたって!」

「え? カブトムシってなに?」

「提督は大丈夫です。翔鶴さん、加賀さん、どうなんですか?」

「え? カブトムシって何ですか? 電柱?」

「惚けないでください! 言ったのは貴方ですよ!?!」

「ええ!!!? そうなんですか?!?」

「驚くところ違あう!!! もっと巨大なカブトムシに驚いて!!!」

「そんなのいる訳ないじゃない浜風。そんなのは幻想よ」

「でも加賀さん、先程翔鶴さんがカブトムシにぶつかってその衝撃で提督が……って、うわ何言ってるのこの娘みたいな表情やめろ!!! アンタらが言ったんでしようが!!!」

「いやでも変な事言うから何かあったのかと……」

「何かあったのは貴方達の方ですよ!!!」

ダメだ……この人達に話し掛けては一向に話が進まない……！  
やはり自ら詮索してやる他はないようです……。

「ねえハメ風」

「浜風です!! 川内さん、間違えなくてください!!」

「ごめんごめん。私達は戻るから、後はよろしくね」

「え……? あ! はい、分かりました。お疲れ様でした、川内さん、神通さん」

「お疲れ〜」

「お疲れ様です」

「ハメ風さん!」

「浜風です!!!」

「私達は司令官の記憶を取り戻すのに協力するわ!」

「元の司令官に戻れば皆さんも戻るはずなのです!」

「わ、私も協力します……!」

はっ!! そうだ、私は忘れていた。

提督が記憶を失った理由ばかりを突き止めていた。

本来なら私も記憶を元に戻したいとそう願ったはず。

よし、漣さんのおかげで気が取り戻せそうです。

「分かりました……ありがとうございます」

「どうしたんだ浜風？」

「だからハメ風ですつて！ 何度言えば分か——じゃなくて、浜風です!!」

「間違えたな今」

ペースに乗られてはいけませんよ自分……!!

ここは冷静に対応しなければ負けです!!

「もう記憶を失った理由に関しては聞きません。そういう事にしておきましょう……ただ問題は一つ、どうやって記憶を戻すかです」

記憶喪失を治す為の色んな説を聞いた事があります。

「例えば……記憶を失った本人が持つキツカケ、場所やその風景などが鍵となります。また頭をぶつつけたりするとショックで元に戻るとか聞いた事ありますね」

「なるほどなのです！」

「しかしながら私としては頭をぶつつけたりするのはあまり好みません……何かしら提督が持つキツカケや物事を聞いた方がいいでしょう」

「んじやとりあえずもう一回亀甲縛りしましょうか」

「そうだな」

「いやそうだなじやないですよ!!! なに普通に躊躇いもなくやろうとしてるんですか





「何でこの夫婦は自ら性癖晒して上から目線なんですか!!!  
 ホント腹立つなあこの人達!!!  
 何なんですかこの馬鹿夫婦は!!!」

「馬鹿ではありませんよ。一旦落ち着きなさいハメ風」

「すいませーん、言葉に説得力が無いでーす」

「提督が記憶を失った事に翔鶴は気が動転してるだけなのよハメ風。ほら二人とも馬鹿みたいプレイして愛し合ってたじゃない?」

「加賀さんも馬鹿つて言ってるじゃないですか」

「それで提督が記憶喪失した時、翔鶴はショックのあまりに泣いてしまったのよハメ風。無理ないわ、愛していた人が突然自分の事忘れてるんだもの……二人でやったプレイも……」

「いやそれは忘れていいと思います」

「今のように楽しそうに振舞っているけど、心の内はきつと悲しいはずよ。あまり無茶言わないであげて、今のプレイも何か記憶を取り戻すキツカケになるはずだわハメ風」

「一言余計過ぎて全く耳に入らないんですけど。一々プレイつて言葉挟まないと駄目なんですか? そういう病気ですか?」

「とりあえず今は見守りましょう、経過を見て判断するべきだわ。そう思うでしょう?」

「ハメ風」



「お前も充分気が動転してんだろうが!!!」

「う……あれここは？」

「あら目覚めたようね五月雨、大丈夫かしら？」

「はい……大丈夫です加賀さん。皆さんは……？」

「今は提督にどんな事させるかで話し合ってるわ」

「なるほど……加賀さんは何故ここに？」

「貴方だけ置いておく事は出来ないでしょう……私が部屋まで送ってってあげるわ、案内してくれるかしら」

「うわっ、そんな！ お姫様抱っこしてもらって悪いです……！」

「大丈夫よ、私は構わないわ。ほら行きましょう」

「は、はい……」

（流石に執務室の惨状を五月雨に見せるのは駄目ね……鼻血を出し過ぎて失血死しかねないわ……）

## 11. すいませんでした

「クツクツクツ……」

「グッ……!!」

「貴様ノ能力ハソノ程度ナノカ？ コノママデハ暇潰シニモナランゾ？」

「クソガツ!!」

「クツクツクツ……アーハツハツハツハツハツハツハツハツ!!!」

「……何ヤツテンダオ前ラ」

「オセロ」

「オセロ!!? ジャア何今ノ流レ!!」

「イヤア何ダ、ネ級ガアマリニモ弱過ギテ一芝居シテタ」

「私ハチ級ニ見下サレルノガ嫌デ悔シガツテタ」

「アノサア……イイ加減アノ馬鹿鎮守府ヲ攻メナイカ？」

「ヤダー、面倒臭ーイ。レ級ノワキガ並ニ臭ーイ」

「誰ノワキガ臭イダコラ。オ前<sup>チ</sup>級ノマン■ホドジャネエヨ」

「ンダトコラ、ブツ殺スゾコラ」

「アー上等ダコラ、表出口ヤコラ」

「喧嘩スルナラ外デ殺ツテクレ」

「オ前ネニ言ワレタクナインダヨ足臭ババア」

「ハアアー!!! ブツ殺スゾゴラア!!! 何が足臭ダコラ!! 毎日欠カサズ綺麗ニシテルモ

ン!! 臭クナイモン!!!」

「テカ何故レ級ハココニ来タンダ?」

「ン? ア、ソウソウ。コノヤリマ■ノ所為デ忘レテタ」

「ヤリマ■言ウナ殺スゾ」

「実ハナ? アソコノ馬鹿鎮守府ナンダガ、ドウヤラ提督ガ記憶ヲ失ツタラシイゾ」

「記憶ヲ? 何デ?」

「ンー説明シズラインダガ、何カ巨大ナカブトムシニ頭ヲブツケラレテ、ソノショックデ

記憶ヲ失ツタラシイ」

「ヘー ज्याア今ハ私達ノ事モ知ラナイノネ」

「ソウダナ。私達ノ事モ……ウン?」

「忘レテルナラ容易ニ攻メレルン ज्याナイノカ?」

「ナルホド! ソノ手ガアツタカ!!! ज्याア今スグ行クゾ!! アノ馬鹿提督ノ所為デ、

フアミコンノカセツト息吹キカケラレテ壊サレタ恨ミガアルカラナ!!!」

「恨ミノ理由ガ薄過ギル」

「……………トイウ訳デ来マシタ」

「いや来ましたじゃねーよ!!! 隣に住んでる友達の家感覚で敵の前線基地来るな!!!」

翔鶴や浜風達に色んな事されて二時間後の事だよ畜生。

何かいきなり深海棲艦攻めてきたよ畜生。

えーつと、雷巡子級と重巡ネ級と戦艦レ級か……やたら強い奴ばかりだなオイ。

つか何でだよ……何でこのタイミングなんだよ!! こちとら記憶失つて(るフリをして)んだよ!! 率直に言うけど来るなよ!!!

すげえ皆が敵視した表情で艦装構えてるし……翔鶴や浜風達もいるし……。

何故か陽炎と不知火いるし……いつの間に遠征から帰ってきたんだよ!!

しかも何だよ恨みの理由がカセットに息吹きかけられて壊されたって!!!

んなもん記憶に無えよ!!!

「何ダ、記憶ハ失ツテモ敵ダツテ分カツテルノカ」

「そりや何年も戦つてるのニュースで報道されたら嫌でも知ってるっつーの」

「ニュースデ報道サレテルノカ」

「イエーイ! 私達有名人ダア!!!」

「ヤ〜イ！ 才前ラ全員下級国——」「何か腹立ちますねこの敵、ぶつ殺していいですか  
陽炎姉さん」

「いいから話を聞きましようか不知火。とりあえず千級の頭を驚掴みにするのはやめな  
さい、血滲み出てるわよ」

「つて言うか来た理由はそれだけなのか？ この数を前にして戦えるお前らじゃないだ  
ろ？」

「残念ダガ私達ハコレデモ歴れっきトシタflagshipノ格ヲ担ウ強者ダ、現ニ才前ハ足  
ヲ震ワセテルダロ」

「震えてねーし、足がお前の冗談話で笑ってるだけだしー」

「それを震えてるつて言うのよ司令官」

「震えてない!! 両足にバイブつけられてプルプルさせられてるだけだ!!」

「一体どんな使い方してんのよ!!!」

「何か色々変な事言ってるようですが、まさか記憶を失ってな……失った司令を誘拐し  
てそちら側にさせようとも思ってるのですか？」

「ソウダケド何力？」

「いや何さぞ当たり前の様な感覚で言ってるのよ、まるでこつちがおかしいみたいじゃ  
ない!!」





つか何で俺が記憶を失ってる（フリしてる）事知ってるんだ……？  
どこから得たんだそんな情報を……！

「ン？ ソノ眼……サテハ才前……覚エテルナ？」

「……………」

何っ?! 眼を見ただけで見抜きやがった!!?

流石に警戒し過ぎたか……！

「忌マワシキソノ眼……貴様ハ覚エテイルハズダ……一体何人、私ノ部下ヲ殺ツタカ  
言ツテミロ……」

「……俺、童貞なので0人です」

「イヤソツチノヤルジャネーヨ!!! 殺スノ方!! 殺ダヨ!! 意味分カル!!!」

「奇遇ダナ……私モ処女ダ……」

「ドコガ奇遇ダ!! 照ラシ合ワセル要素ガ違ウダロ!!! 話スリ替ワツテンゾ、今マデノ  
雰囲気ドコイツタ!!!」

「でもいつかは捨てたいなって思ってます」

「才前ノ貞操ナンテドウデモイヨ!!! 世界一クダラナイワ!!!」

「ソウカ……ソコニケツコンシタ艦娘ガイルトイウノニ？」

「うっ……いや、だつてえ……いざ本番つてなつたら、恥ずかしくてえ……心臓バクバク

「でえ……」

「エ？ 何ナノ？ 何ナノコノ状況？ 何デ相談所ミタイニナツテルノ？ ウチラ敵同士ダヨネ？」

「分カラナクモナイ……私モ指ヲ挿レル時ハ、緊張スル……」

「オーイ話ガ噛ミ合ツテネーゾオ!!!」

「私も最初は緊張したけど、やり方知って慣れれば大して怖くはないわよ」

「私も陽炎姉さんに手ほどきされて慣れました」

「何デサリゲナクオ前ラハ話ニ参加シテンダヨ!!! ツッコメヨコノ状況ヲ!!!! ツイサツキマデツツコム側ダツタロオ前ラア!!!」

「え？ 何をツツコむって？ デ■■■■ド？」

「デ■■■■ドは上級者向けなのよ司令官。最初は指の方がいいわ」

「アレはあまりおすすめできません」

「ソウカ……レ級ハドウナンダ？」

「ハア!?! 何デ私ニ振ルンダヨ!!」

「イヤコノ前ネ級ガ……」

『レ級ハ毎日、尻ニデ■■■■ド挿レテ艦装動カシテルカラ、アイツハ頭ガイカレテルンダゾ』

……ツテ言ツテタ」

「誰ノ艤装ガ、デ■ドダコラアアアアアアアアアア」

「それチ級!! チ級だから!!! 殴ってんのチ級だから!!! 殴る相手間違ってるからアアアアア」

「!!!」

「デ■ドナンテ挿レテル訳無エダロ!!! テメエノ脳ミソハドウナツテンダ!!! アリトアラユル穴ニデ■ド突ツ込ンテ刺シ殺スゾゴラアアアア」

「いや怒り任せに訴えてるけどそれチ級!!!」

「ウルセエ!!! チ級ノ『チ』ナンテ『恥』ノ字ナンダヨ!!! 恥級ダ恥級!!! 今カラソウ呼ンデヤル!!!」

「全ての海にいるチ級に謝れ!!!」

「才前ラム軒並ミ変態ナ奴バカリダ!!! 何ダヨ足ニバイブツケテ震エテルツテ!!! ドンナSMプレイヤツテンダ!!!」

「今ここにいる俺達に謝れ!!!」

「ドウセ人間ナンテ全員変態ナンダヨ!!! モウ地球ジャナクテ『恥』球ダ!!! コンナ変態塗レタ星ニ生マレルンジャナカツタクソガ!!!」

「全世界の人達と地球に謝れ!!!」

「駄目ですね、完全にキレて聞く耳を持ちません。一応殴る事で暴走は抑えられていま

すのでこちらに被害はありませんが」

「殴る事って、殴られてんのチ級なんだけど。ただの八つ当たりなんだけど。白い仮面が紅く染まって鎮守府の執務室で殺人事件起きそうなんだけど」

「別にいいんじゃない？ 人じゃないし」

「どこをどう見たらいいって思えるんだよ、人の拠点が殺害現場になるんだぞ考えろよ!!!」

「フツ……今マデノツケ、ダナ……」

「つか何でアイツはあんな偉そうなんだよ！ アイツじゃねえのか元凶は!!」

「イヤ……アレハ完璧ニチ級ガ悪イ……」

「チ級何も言っていないのに!? もうちよつと考える要素無いのか!!」

『『恥』級ダカラ』

「理不尽だなオイ!!!」

「ワ……私、違……!!ウツ……!!」

「……仕方ナイ……レ級、イイ加減ニシロ。殴ルノハソコマデダ」

「チツ。命拾イシタナ、クソガツ」

チ級がおぞましい姿で倒れてるし……臓物出てつぞ平気なのかアレ……、モザイク必須だし、痙攣とかしてるし……。

「ていうかそちらのレ級暴れ過ぎなのでは？ 私達の執務室が臓物塗れなんだけど？」

「普段カラ血生臭イ戦闘ヲシテルンダ、別ニ戸惑ウ事ジャナイダロ。私ノ所為デハ無イシ、私達デモナイ」

「いやこんな惨状にした元凶お前え！」

「大丈夫ダ、コノ屑ハ土ニ還ル様ニナツテイル。放置シテモ問題ナイゾ」

「海の底じゃなくて？」

「最近ハ私達モ地球環境問題ニ取り組モウト思ツテイテナ？ 死体ガ土ニモ還ル様ニ再設定シタンダ」

「オイ今再設定とか言つたぞ、アイツら設定ボタンでもついてんのか」

「イヤ〜最近ハエコブームデネエ〜、トニカク何デモカンデモ捨テル奴ヲ土ニ還スノガ趣味ナンダ〜」

「オーイ土に還るつて言うか土に埋めてるぞソレ——ツ!!」

「イイジャナイカ、チャント分解サレルンダカラ。地産地消ダヨ、地産地消」

「いや使い方間違つてるし、お前から頭がプラスチックで出来てんのか！」

「そんな事よりもだいたい話が外れましたね、最初どんな事でしたっけ？」

「えーっと確か、アンタ達深海棲艦ガ私達の司令官を攫おうとしてみる話だったかしら」

「ソウダナ、私ガ出テキタ時カラダナ……話ヲ元ニ戻スカ……ダガシカシ、一ツ聞キタイ

事ガアル」

「ん？ 何だ？」

「デ■■ドツテ何ダ？」

「そこからかよ!!!」

「ソコカラカヨ!!!」

「イヤ〜ヤラレチャツタネ〜」

「うわっ！ 起き上がったグロツツ!!!」

「ヒイ!!？」

「アレ？ 何モ見エナイゾ？ 目ノ前ガ真ツ暗ダ。何コレ？ 地獄？」

「臍物垂らしといて平然と生きてるお前が地獄だよ」

「ヨイシヨ、ツト……アレ？ 私ツテ誰ダツケ？」

「おい何か記憶失なってるぞ、殴り過ぎじゃないのかー？」

つか何でお前が記憶失ってるんだよ!!

本来俺だつて失ってる（設定な）んだよ!! 惚けやがつて!!

「……名前、覚エテルカ？」

「デ■■ド」

「ヨシ」

「いやヨシじゃねーよ!!! 完全に前の記憶引きずってんじゃねーか!!!」

「今日カラオケ前ノ名前ハ、デ■ドダ。イイナ？」

「アイアイサー」

「おい本当にそれでいいのかー!!!?」

「イインダヨ。面倒臭インダ、一々姿カタチ似タ奴ニ同ジ名前ツケンノ。大体似タ名前

ツケルグライノ器用サガ大事ナノサ」

「ハイ、私ノ大腸デ作りマシタ。特製デ■ドデス」

「おいこれ器用過ぎんだろー!!!」

「……ソロソロ撤収ノ時間ダ、レ級、ネ級、デ■ド。帰ルゾ」

「は? おいちよつとま……ちよつ……! 人の家に気持ち悪いアダルトグッズ置いて

帰るなアアア!!!」



## 12. すいませんでしたと言いたい

深海棲艦ズが過ぎ去った後は執務室が惨状と化したので黙々と掃除しました。

「はあ……見事に荒らして帰りやがったなアイツらめ……」

「本当に害悪な奴らね。後で戦争仕掛けてやろうかしら」

「それについては賛同します陽炎姉さん。ストレス発散の為にちよつとだけ行きますか」

「コンビニ行く感覚で出撃するのはやめて」

「元と言えば司令官がこんな事するからよ。皆がおかしくなったのも提督が私達のアプローチに気づかないし、性癖は童貞並に気持ち悪いほど溢れてるし、童貞だし、ケツコンしてるのに未だに童貞だし、まさに童貞中の童貞よね」

「ねえ童貞って何回言った？ 俺死んでいい？」

「ダメよ」

「ダメです」

いやアプローチについては本当に気づかないというか、俺が鈍感過ぎるのかな。まったく記憶に無い……。

「Admiral!!」

Admiral?

という声はつまり海外艦の娘達かな?

「身体は大丈夫なの? 体調はどう? 怪我はない?」

振り向いた瞬間に身体をぺたぺた触ってくるこの艦娘は……、

「あ、あのー……」

「あ、そういえば忘れてたのよね……私はQueen Elizabeth Class  
s Battleship Warship! Admiral……またよろしく  
頼むわね……」

俺ならある程度話せるから聞いてても分かるけど、多分普通の人なら『え? なんて  
?』って聞き返すと思う。

英語って案外難しいんだよな。

「え、ええ……よろしくお願ひします……」

「……本当に失ってるのね……」

「はい……まあ……」

「はあ……ホントに面白い事をしてくれるな……Admiralは」

今度はアークロイヤルが来てくれた。

「貴女は……」

「……私は Her Majesty's Ship Ark Royal……アークロイヤルとでも呼ぶといい。改めてよろしく頼む」

アークロイヤルが頭抱えてるなあ……まあ上官の記憶喪失となれば面倒臭い事この上ないだろうし、同情しますよこれは。

「何故こんな事になったんだか……急に仲間もおかしくなり始めたし、何だか別世界にいるような感じだ」

「そうね、少し気味が悪いわ」

二人がこの話をしているという事は少なくともまだ正常なタイプかもしれない。

まあ海外艦だから問題ないかな。

「ところで Admiral, Warspite とはいつ結婚するんだ？」

「What!!?」

「What!!!?」

いきなりぶつ込んできやがったなアークロイヤル!!

お前さつきまで他人事のように話してた癖にそのまんまお前もおかしいじゃねーか

!!!

「ちよ、ちよつと Ark Royal? What Are you saying!?!」

私が Admiral と結婚だなんて……」

「そうだぞ！」

失礼過ぎるだろ!!

「謝れ! ウォースパイトに!!」

「もう……してるのに……// //」

「あーダメだったーッ!!」

「こいつもおかしかったーッッッ  
!!!!」

「え? も、もうしてるんですか?」

「してるでしょ?」

「してたのか?」

「どうなんだ?」

「……あまりのボケに耐え切れなくてこっちに話題振ってきたわねあの司令官……一度ぶん殴ってやろうかしら」

「出来たての産業廃棄物をプレス機で潰した様な顔をしていますね」

別に僕の事何と言おうと一向に構わないけど、君達のその罵倒のレパートリーはいくつまであるんだい?

「こら、やめたまえ二人とも」

この声は……？

「貴女は……？」

「こんにちは……いやはじめまして、だな。私は Graf Zeppelin 級航空母艦一番艦の Graf Zeppelin だ。以前は グラフと呼んでいたのだからもそうしてくれると嬉しい。これからまたよろしく頼むぞ Admiral」

自己紹介と共に握手してくれたこの艦娘は グラフ・ツェツペリン。

前は名前が長いから グラフと呼んで結構仲は良かった気がする。海外艦同士の衝突の仲介役が多くてかなりの苦勞人。それでいて冷静沈着且つ洞察力が素晴らしく、物事を奥深く見定める大人な姿勢を兼ね備えた常識人だな。

だか時たまに休むよう言うけど彼女自身はあまり休む事は好まないんだよね。とても苦勞してるだろうし、感謝してる身としては休憩してもらいたいな。

「しかし本当に記憶を失っているのだな……悲しいが少しずつ取り戻していこう……なに、大丈夫さ、私達がいるからな……それに」

グラフがいきなり顔を近付けてきた。

一体何を――、

「後、その嘘くさい演技で既にバレバレだ。しかしそれはそれとして面白そうだから乗ってやるつもりでいる。ありがたく思うことだな」

バレてたアアア!!!

「よっしゃ!! やつと来た!! これで勝つる!!」

「ツ!!! ツツツツ!!!」

コソコソ話だから周りには聞こえなかったからいいけど、後ろの陽炎と不知火が初めての仲間にもちやくちや感動してガッツポーズしまくってるのは気付かないで置こう。

「待ちなさい!! 私達もいるわよAdmiral!!」

「出たわねビスマルク!!」

「ええそうよ!! 残念だったわねウオースパイト! 私達がいるからにはもうAdmiralの安全は保たれたも同然よ!」

「ビスマルク、オイゲン、せめて自己紹介してからAdmiralに話してくれ」

「いいでしょう! 私ドイツが誇るBismarck型超々弩級戦艦のネームシップ、Bismarck!!」

「そして私がアドミラル・ヒツパー級の重巡、プリンツ・オイゲン!!」

「Z 3よ」

「Z 1……」

「そしてそこにいるのがGraf Zeppelin!! 最近また胸が大きくなってブラを買い換えようと思ってるらしいわよ!!」

「余計な事言うな!!!」

「グラーフがツツコんだ……。」

「以上! よろしく頼むわよ、Admiral!!」

「何か前にも見たなこのシーン。」

「あれか! 白露達の登場ポーズと似てるやつだ。」

「やっぱああいう集合ポーズは好きなのかな。」

「イギリス艦がAdmiralの記憶を改竄しよう√1000分早いのよ」

「そちらこそ自己紹介に12/24秒は掛かりすぎじゃないのか? もっと縮めたらどうだ?」

「うだ?」

「よく言うわ、朝寝坊してSin( $\alpha + \beta$ )分遅刻した貴女こそ縮めたらどう?」

「ふん大したものだな。時間にreasonableなお前が日本のインスタントラーメンを12÷2分して忘れた事を覚えていないとでも思ったか?」

「色々気付いて言わなかったけど、一々お前ら時間の言い方ややし過ぎんだよ!!!」

「単純に言えよ!! 分かりづらいわ!!」

「いいから貴女達はそこで指くわえて見てなさい!」

「Admiralの記憶を改竄するのは私よ!!!」

「堂々と本人の目の前で改竄宣言しやがったぞコイツ!!!」

「堂々と本人の目の前で改竄宣言しやがったぞコイツ!!!」

「何が改竄だ!! Admiriralにそんな事はさせるものか!!」

いやお前それさつきやろうとしただろうがアア!!!!

「そこまでだ!!」

「ツ!」

「うわっ!!」

グラーフが大声出してビスマルクとアークロイヤルを退けてくれたおかげで口喧嘩が止んだ……。

流石は仲介役はやる事が違う……見習わなければいけないな。

「双方そこまでだ。今は喧嘩している場合ではないだろう、Admiralも困っている……改竄は後にしてくれ」

いや改竄も止めさせて!!?

「とにかく今は記憶を取り戻す方法を考えるのが得策だろう。互いに協力し合い、Admiralを導かせていくのが我々の役目だ。聞いた話によると記憶喪失の原因は巨大なカプトムシの激突による頭への衝撃で記憶喪失になってしまったらしい」

「なるほど……仕方ないわね……まあ別に? 私達は構わないけど」

「私達も一向に構わないわ」

「ならそうしてくれるとありがたい。では早速だが、Admiralの記憶を取り戻せ



る効率のいい方法は無いか？」

めちやくちや先導して順調に進んでるけどグラーフさん、俺の記憶喪失のフリを知って進めてるんだよな……何考えてるのか怖い。

「私達とAdmiralの共有した記憶の一片を語るかまたは実際に演じてみて、Admiralの記憶にShockを与えてみるのはどうかしら？」

「なるほど。いわゆるショック療法のようなモノで、一連の行動を流してみれば何かしら思い出すかもしれないという算段だな。悪くないだろう」

「確かにその方法であれば確率は高いわね。やってみる事に価値があるわ」

「オイゲンは賛成です！」

「私達も賛成よ」

ああ確かにそんな方法聞いた事があるなあ。

あまり確実性は低いけどやってみて効果はあったとか無かったとか書いてたような気がする。

「なら早速やってみよう。まずはAdmiralとどんな事をしたか、何か思い出しやすそうな記憶はあるか？」

「あるわよ。まずこのビスマルクに任せてもらえないかしら」

「お前がかな？ 大丈夫なのだろうな？」

「貴女達とは違うのよ、見てなさい！ 私とAdmiralとの感動秘話を！」

——あれは夏の暑い日……私とAdmiralが初めて出会う前の事……。

——私はいじめを受けていた。入学した高校で妬まれて同じクラス女子のからちよつと待てエエエエエ!!!」

「何なんだ今の全く関係無い時代設定は!!! お前とAdmiralがHigh school 001で同じなはずないだろ!!! 自分の妄想を重ねるなよ!!!」

「うるさいわねアークロイヤル!! 話はまだ途中なのよ！ 黙ってなさい!!!」

「黙っていられるか!! 妄想に溢れたepisodeなど聞いたくないんだよ!!」

「どこが妄想よ!! この話にはちゃんとした続きがあるのよ!! いいから聞いてなさい!!!」

——私はいじめを受けていた。入学した高校で妬まれて同じクラス女子のから酷いじめを受けていたのだ。

——何故いじめを受けているのか当時の私は理解出来ず、ただただいじめられる毎日だった。

——いじめの主犯はアークロイヤ「お前エエエエ!!!」

「何でいじめの主犯が私なんだ!! 明らかお前、私の事からかっているだろ!! そもそもこんな記憶なんぞ捏造なのに何でそう易々と入れ替えられるんだよ!! ふざけるのも大概にしろ!!」

「いやこれはAdmiralに分かりやすく例えただけよ。決して誰一人貴女だなんて言っていないから、貴女がやってたなんて言っていないからああ??」

「こっんの……!!」

「ビスマルクお姉様! 続きを!」

「ええ勿論!」

——いじめの主犯はアークロイヤルとウォースパイト。アイツらは私が美し過ぎるからって自分の醜さを思い知らされたから妬んでいじめてきた。

——いじめはとも酷かった。体操着はボロボロにされるし、トイレに入れば水はかけられるし、無理矢理下着を撮ろうとしてきた。

——そのいじめが辛くて私は帰ってからいつも自分の部屋で泣いていた。とても辛くて、辛くて、死にたいと思った。でもある日……。

——私はいつも通り登校して教室に向かっていた。今日もいじめられるんだろうな……そう思っ顔を俯きながら歩いていたらその時。誰かにぶつかってしまった。

——私は恐る恐るぶつかった相手の顔を見る。そこにいたのは……、

——巨大なカブトムシだった。「いや何でだあああああ!!!」

「そこは普通Admiralだろうが!! 何で巨大なカブトムシが出てくるんだよ!!! さっきのグラーフの言葉引きずってるじゃないか!!! 何なんだよ本当に!!!」

「う、うるさいわね! 仕方ないじゃない、話してる最中に突然出てきたんだもん! 私は悪くないわよ!」

「さっきから妄想に妄想を重ねておいてその言い草か!! 本当にAdmiralの記憶を取り戻したいのか貴様は!!」

「そこまで言うんだったら貴女こそ何かエピソードは無いの?! さっきから事ある毎に大声出してうるさいのよ!!」

「ぐっ……それは……!!」

「あるわよ」

「っ!」

ウォースパイトが手を挙げてくれたぞ。

黙って聞いてたけどコントでもやってんのかビスマルク達は。

「Warspite? 本当か?」

「ええ本当よ。Admiral、聞いてくれるかしら?」

「は、はい……分かりました」

——私も Admiral と初めて会った時の事を語りたいわ。

——当時友軍として Japan に行く事になった私は不安だらけで夜も眠れなかった。

——そして遂に Japan へ到着し、この鎮守府に着任した当日。私は初めて Admiral と顔を合わせた。

——その時私は驚いたの。

『Hello. I, m <sup>お</sup> <sup>目</sup> <sup>に</sup> <sup>か</sup> <sup>か</sup> <sup>れ</sup> <sup>て</sup> <sup>光</sup> <sup>榮</sup> <sup>で</sup> <sup>す</sup> meet you』

——まさか Admiral が英語を話せるとは思わなかったから、無意識に驚いていたわ。

——でも必死に練習したような形跡が執務室のあちらこちらで見えていて、 Admiral は私の為に頑張つて喋ってくれていたの。

——私は嬉しかったわ。日本にもこういうフレンドリーな人がいるだなんて予想もしなかったから、不思議とそこで一気に不安は無くなった。

——したら Admiral は私の顔を見つめ続けて固まっていたわ。どうしたのかしらと声を掛けたら Admiral は片膝を床につかせ私の手に触れてこう言ったの。

『Private marry——』「はああああああああ??」

「ちよつと待ちなさいよ!! 貴方達がEhe結婚なんてしててる訳ないでしょ!! 何さりげなく改竄しようとしてるのよ!! 最初ちよつといい話だと思っちゃったじゃない!!」

「いいえ事実よ。Admiralは記憶が無いだけでこれから本当にさせるから問題無いわ」

置いてけぼりにされてるけどこれは本当です。

互いに円滑な関係が進む様に前もって発音練習してんだよね。英語はある程度出来るけど海外の人達とは実際話した事が無くて、不安がられないように頑張ってた。

「何なのこの戦艦は!! 改竄に何の躊躇いも無いわね!!! アークロイヤル! どうなつてんのよこれは!!」

「Warspiteの意志は私の意志だ。当然結婚する事は当たり前だろう、では次は私が語ろうか」

「はア!? ちよ、勝手に進め——」

——あれはJapanが冬の頃だな。

——薄暗い夜、とある森の道でAdmiralが狼に襲われていた所を私が……!!

——白馬と共に駆けつけた!! 「おいコラ待てええええええ!!!」

「色んな世界観混ざり過ぎてとんでもない事になってるわよ!! さつき私のエピソード

に文句言つてた癖に貴女も妄想入れ込んでるじゃない!! 何が世界観が違う、よ!! 他人の事言えないわよ貴女も!!」

「Japanは幻想が織り成す四季とりどりな国だ、多少世界観が違くとも成り立つ場所など何処にでもある」

「薄暗い夜と森の道ならともかく、白馬と共に駆けつける人間が日本のどこにいるつてのよ!!」

「そういうお前こそ祖国が違う癖によくHigh schoolが同じだとか言えたものだな!!」

「貴女だけには言われたくないわよ!!!」

「あのー……次、私いいですか?」

「っ? ああそうね、今度はオイゲンの番ね」

「まったく誰かのせいでめちやくちやだ。今度こそは頼むぞ」

「はい! このオイゲンにお任せあれ!」

——これは私とAdmiralの思い出です。

——まず初めて会った場所は高校の屋上で、そして初めてデートした場所が森の道で、プロポーズしてくれた場所がこの鎮守府の執務室で、それはそれはとても……

——いい……思い出でした。「もう色々全部混ぜてんじゃねーかアアアア!!!」

「なに一人で思い出に浸ってるんだ!! 全て私達の episode をパクって言うてるだけだろ!! どうなってるんだソイツの頭は!!!」

「あの戦争では負けても私と Admiral の思い出は誰にも負けません」

「私だって負けないわ。戦争では勝ったけどね」

「無駄に張り合おうとするな!!! もういいだろそんな事!!」

「ふははははは!!! 無様ねウォースパイト!! 上司の顔が見てやりたいわ!!!」

「何でお前はそこまで威張れるんだよ!!!」

「グラーフ……これ收拾つくと思うか？」

「いや無理だろうな」

「ですよね」